

# 良玄家集初稿本と弄璞集について

Relocation of the Original Manuscript of Ryogenkashu — the Book of Rohakushu —

中西健治  
日下幸男

## はじめに

近世初頭の地下歌人賀茂の伊藤南可（慶長十七年～元禄頃、八十余歳）はのち良玄と名乗り、大坂城代青山宗俊の招きで青山藩御歌書役となる。南可及びその家集については、中西がかつて「青山記念文庫蔵弄璞集研究序説」（『兵庫国漢』三五、平成元年三月）、『細江草』所収の良玄詠歌」（『相愛国文』四、平成三年三月）、『弄璞集』補注、「秋夕和歌」について」（『相愛大学研究論集』八、平成四年三月）などの稿を発表し、上野洋三氏と共編にて篠山鳳鳴高等学校青山記念文庫蔵『弄璞集』五冊を底本に翻刻して『弄璞集 本文と索引』（平成五年一月、和泉書院）を上梓している。

日下は、南可良玄が中院通村の弟子とされるため、『弄璞集』に注目していたが、たまたま谷山茂博士旧蔵本『良玄写和歌集』仮綴一冊を入手し、それが『弄璞集』に先立つ良玄家集初稿本らしきことを知り複写物と翻刻を中西に

提供し、相談したところ、初稿本の存在を世に周知せんがため、本誌に掲載すべしと相成った次第である。  
翻刻・解題原稿は日下が担当し、中西が校閲した。ただし文責は日下が負う。

## 解 題

最初に日下蔵『良玄写和歌集』一冊（以下、本書と称す）の書誌を記す。無表紙。従って無外題。内題位置にある「良玄写和歌集」はその下の（ ）書きの「其名称ヲ知ルニ由ナキヲ／以テコノ名称ヲ付ス」と共に後人の補筆にて、もとは内題もなし。仮綴一冊。全五七丁【墨付五六丁、白紙中一丁（四季と恋雑の間）。巻末一丁は筆ならしのため落書き】。法量縦二九・五、横二二cm。歌一首一行書。一面一行。ミセケチ・墨消は当然として、題のみで歌を欠く部分や、題と題との間に増補のための空間が設けてある部分があり、頭部・行間などに書き込み増補が見られる。稿本と見る所以である。後人補筆の内題もどきを除いて全冊一筆。兵庫県立篠山鳳鳴高等学校青山記念文庫蔵『弄璞集』五冊（以下『弄璞集』と称す）は『四冊之外／続弄璞集 滅後門弟子拾遺之』の第五冊を除き、『弄璞集』上下、『続弄璞集』上下（外題別筆）計四冊の本文は良玄自筆とされる。本書は内容的に、表紙外題・本文とも全冊一筆の『弄璞集』上下（上は四季部、下は恋雑部）に相当するので、両書を比較するに、同筆と認定される。『弄璞集』上下が良玄自筆とすれば本書も良玄自筆と判断される。

次に本書と『弄璞集』との位置関係であるが、本書奥書に「寛文壬子極月廿八日／良玄」とあり、『弄璞集下』の奥書に「延宝乙卯十月六日 良玄（花押）」、『続弄璞集下』奥書に「延宝辛酉曆五月下旬於遠州／浜松城下書之／七才／良玄」とあるのを見れば、本書の方が先に成立したことがわかる。

寛文壬子（十二年）は良玄六十一歳に当たり、暦一巡を機に余命いくばくか知りがたく、四月廿日友人と伊勢参宮

の旅に出て、その道すがら法華經一部、阿弥陀經十卷、光明真言一千遍、念佛名十五万遍を唱えている。帰京後、誰に見せるあてもなく歌稿をまとめ、四季恋雜の部立を行い、増補の書き込みをして師走も押し詰まった頃に、一応の形を見たので奥書をしたためたものと思われる。本書七八〇番歌詞書に「しぬへくおほしける比、同行の法師に念珠をかたみにとらすとて、つゝみかみに」とあり、良玄が重病にかかったことも本書をまとめるきっかけとなったのかもしれない。奥書の丁に、

右之外、述懷百余首、秋夕百首、歳暮五十首、

并伊勢参宮記等別記之。

はかなしななかれての世にたれみよと

おもふかすかく水くきの跡

とあるのを見れば、定数歌の百首・五十首の類は省き、懷紙短冊の類のみまとめたかと思われる。

本書の歌数が七八一首（奥書丁の歌を含む）であるのに対して、『弄璞集』上下の歌数が一一〇一首と多いのは「伊勢参宮記」などを含むからと思われる。前者にあつて後者がない歌、その逆もあり、その間に切り継ぎ・切り出しが多く行われたことがうかがわれる。本書と『弄璞集』の間に、まだ見つからない中間段階の稿本があるのかも知れない。

『弄璞集』が編まれた延宝乙卯（三年）は、良玄が青山宗俊の誘いによって大坂に移居した後のことであり、御歌書役として家集とは言えないまでもそれらしきものをまとめようとしたのかも知れない。当時は親王公卿ですら、『愚詠』『愚詠草』『詠草』『詠草留』（道寛親王、中院通村など）と表紙にしたためていたことを考えれば、地下歌人の身で『弄璞集』などと名を付けるのは僭越にすぎるという考えもあろうが、「弄璞」の意味を考えれば、みがかざる玉をなぐさみにするという程のことであり、あながち僭称ともしがたい気がする。『弄璞集』の表紙の芯紙には「岡本

新右様」宛書状や、山科言繼奥書の『公卿補任』の断簡と思しきものが使われており、業余の仕業であることがしのばれる。

本書と『弄璞集』との歌順の違いについてはここでは触れない。参考までに『弄璞集』の歌番号を翻刻に付しておいたので、それを参照していただきたい。細かく見れば色々問題が見えてくるかもしれないが、それは後考に俟ちたい。

良玄の伝については前述の『弄璞集 本文と索引』に略年譜があるので、ここでは繰り返さない。ただ良玄が御歌書役であったことに引き付けて多少付言したい。良玄のように地下歌人で藩の御歌書役になった人は、その当時多くいる。藩士からなった人もいるが、都で（京都藩邸、大坂蔵屋敷）藩主とつながりをもち、召し抱えられて国元に下った人も多くいる。良玄や山本正重（京から伊勢に移り、福知山藩主松平忠房に召し抱えられ、転封のため肥前島原に下る）らは後者に属する。地下の一大勢力であった松永貞徳門下の歌学者に望月長孝、北村季吟、加藤磐斎、宮川松堅らがいる。長孝は御歌書役ではないが、肥前鹿島藩主鍋島直条の歌道の師である。季吟は幕府歌学方となり、徳川綱吉、柳沢吉保に古今伝授を行い、多くの歌書を献上している。磐斎は伊勢亀山藩主石川憲之に遊仕し源氏三ヶ大事を伝授している。松堅は佐賀藩士武富竹翁に『百人一首五箇秘』を伝授している。『弄璞集』によれば武富竹翁は良玄と交流があったようである。都の歌人とのつながりは諸藩の学問・教育にも少なからず影響したかと思われる。また幕府に召し抱えられた北村季吟は別格としても、良玄や山本正重ら御歌書役は諸藩の蔵書の形成にも大きく関与したものと思われる（夫々の目録参照）。禁裏や堂上を出所とする歌書が、どのような経路で諸藩に入ったのか、御歌書役はどのような働きをしたのか、大変興味のあるところであるが、そこに古い用語で言えば学統、別の用語で言えば「知」のネットワークが存在したことは容易に想像される。日本列島を網羅した「知」のネットワークは「書」のネットワークともつながっているよう。諸学の基礎となる国書伝来の研究には、そのような大きな視点も必要であろう。

う。江戸時代に限ってみれば、貴書の流通及び伝播状況について比較的容易に把握することが可能であるが、千年余の朝野の国書の伝来をすべて俯瞰することは容易なことではない。その基礎となる国書奥書集成にしても巨大なデータベースとなろうが、不可能なことではない。良玄の書写本を骨格とする旧青山藩蔵書の目録（『青山会文庫所蔵和漢書分類目録』平成六年、青山会）を眺めつつ、その意を強くした次第である。

以上

## 凡 例

- 一、日下幸男蔵『良玄享和歌集』一冊をできるだけ原本に忠実に翻刻する。
- 一、翻刻に当たり、左のように措置する。
  - 一、漢字・かなは通行の字体による。ひらかなの意識で書かれたカタカナはひら仮名になおす。
  - 一、句読点は詞書にのみ付す。濁点は付さない。
  - 一、ミセケチ記号は「ヒ」記号で代用する。二字以上の踊り字は原則としてもとの漢字仮名に戻す。
  - 一、本文の題・歌の字配りは原則としてもとのままである。
  - 一、草稿本のため、多くの書き込みがみられるが、本文と同じポイント活字で示す。墨消ち歌の右横にある等類歌を示す勅撰集歌などは別に扱う。
  - 一、書き込みの題、歌については、それぞれその頭部に※印を付して本文と区別する。
  - 一、書き込みの中には本文とはほぼ同じ大きさ・位置に書かれてある場合があるが、行数、墨色、筆の違いを勘案して、書き込みと思われる題・歌の頭部には※印を付す。

一、書き込み部分も本文の題、歌と同様の位置に移動させる。その際、次のように措置する。

①本文題下に小字割注がある場合、小字割注部分を「」で括ってその位置に示す。

②本文題下に小字にて書き込み歌がある場合、書き込み歌を行を改めて本文歌の前に置く。

(例)

柳

さほひめのいかにそめてかはるの野のあるよりも猶青柳の糸

春雨のふりそめしよりぬれてはすみとりもふかき青柳のいと

⇐

柳

さほひめのいかにそめてかはるの野のあるよりも猶青柳の糸

春雨のふりそめしよりぬれてはすみとりもふかき青柳のいと

③本文題下に小字にて書き込み題と歌がある場合、書き込み題と歌を行を改めて本文の題・歌の前に置く。

(例)

竹鶯

鶯不出谷 春も猶谷の戸はそを出やうて身をふるすなる鶯のこゑ

一こゑにちよをこめてや呉竹のねくらさたむる春のうくひす

⇐

鶯不出谷

春も猶谷の戸はそを出やうて身をふるすなる鶯のこゑ

竹鶯

一こゑにちよをこめてや呉竹のねくらさたむる春のうくひす

④本文の上に書き込み題がある場合は、書き込み題を歌の前に出す。

(例)

初春霞 名のみしてせきもへたてす東路のかすむ空より春やきぬらん

初春霞

↳

名のみしてせきもへたてす東路のかすむ空より春やきぬらん

⑤頭部に書き込み歌、もしくは題・歌がある場合は、題・歌の内容によって最も近い本文題・歌の次に配す。

一、書き込み部分のものと位置は原本にて確認されたい。その他不審の箇所は原本で確認されたい。閲覧は事前予約が必要である。

一、墨消ちの歌であっても清書本には載るので省略しない。

一、各歌の頭部に任意の一連番号を付す。脚部（ ）内の数字は『弄璞集 本文と索引』の一連番号と対応する。それがないのは『弄璞集』にない歌である。

一、私意による注記は（ ）内に示す。

一、旧蔵者によると思われる冒頭の近代の書き込み一行は翻刻を略す。参考のために左に示す。

良玄写和歌集（「其名称ヲ知ルニ由ナキヲ以テコノ名称ヲ付ス」）とある。

以上

翻 刻

年内立春

- 〇〇〇一 春はきぬとしは残りぬわかよはひいかにかそへて人にかたらし (弄〇〇〇二)  
 〇〇〇二 雪のうちになを跡とめてしきしまの道ある世とや春はきぬらん (弄〇〇〇三)

(一行分空白)

立春

- 〇〇〇三 君と人のおなし心に春のきて宮もわらやもたつかすみかな (弄〇〇〇五)  
 〇〇〇四 やはらけるひかりも四方にあらはれてみ代のむかしの春そいたれる (弄〇〇〇三)  
 〇〇〇五 岩戸出しひかりとゝもにかすみきてわか日の本の春そのとき (弄〇〇〇四)

(一行分空白)

立春天

- 〇〇〇六 四の時けふたちそむるかすみそといふはかりなる春のそらかな (弄〇〇〇九)  
 春たつ日雨ふりければ  
 〇〇〇七 うくひすの梅の花かさはるきぬと雨のふるすをけふやいつらん (弄〇〇一〇)

※としのうちに春たちける元日

- 〇〇〇八 ※雪の内に立しかすみのうす衣けふはあらはに春やきぬらん (弄〇〇一一)  
 元日

- 〇〇〇九 天の戸を出る春日も今朝はまつ光をそふる賀茂のみつかき (弄〇〇一二)  
 正月二日子日なりけるつとめての日

- 〇〇一〇 引うへし昨日の野へのひめ小松また影わかき春の三ヶ月 (弄〇〇一三)  
 初春風



立春風

〇〇一一 わたのはらやそしまかけていつる日のひかりしつけき春の初風（弄〇〇一四）

春風春水一時来

〇〇一二※春風にさそはれ出るうくひすの声うちそふる谷のした水（弄〇〇一六）

※初春霞

〇〇一三※名のみしてせきもへたてす東路のかすむ空より春やきぬらん（弄〇〇一五）

霞

（一行分空白）

海辺霞

〇〇一四 春といへはこちふく風に波たちてかすみにきゆるあはちしま山（弄〇〇一八）

余寒

〇〇一五 春もまたさえ野のぬまのうす氷をしはにつくく山のあらしに（弄〇〇一九）

鶯

〇〇一六 霞たつ喬木にうつる朝日影<sup>聲にそ</sup>さへにはふ鶯の声（弄〇〇二〇）

※鶯不出谷

〇〇一七※春も猶谷の戸ほそを出やうて身をふるすなる鶯のこゑ（弄〇〇二二）

竹鶯

〇〇一八 一こゑにちよをこめてや呉竹のねくらさたむる春のうくひす（弄〇〇二二）

若菜

〇〇一九 いつかと雪まをわけてみやこ人くるすの小野のわかなをそつむ（弄〇〇二三）

残雪

（一行分空白）

里残雪

〇〇二〇 ふりしきしうつらの床の雪消て春の野となる深草のさと（弄〇〇二六）

※曉梅

〇〇二一 ※うくひすの初音なからに匂ひきてあけかたちかき春の梅かゝ（弄〇〇二八）

梅

〇〇二二 心をはにほひにかへてむめのはなかたみにとまるならひなりせは（弄〇〇二七）

夜梅

〇〇二三 たか宿のねさめの床に匂ふらん月もむかしのはるのむめかえ（弄〇〇二九）

山家夜梅

〇〇二四 山里のね覺の床の春風に人もすさめぬ梅かゝそする（弄〇〇三〇）

隣家梅

〇〇二五 春霞たちえやいつくあしかきのあたりまちかきむめかゝそする（弄〇〇三一）

行路梅

〇〇二六 梅かゝに心をとめてゆく道はなをたととし春のゆふやみ（弄〇〇三三）

古宅梅

〇〇二七 うへをきし人はふりぬる宿ながら春やむかしの梅のした風（弄〇〇三二）

柳有喜色

〇〇二八 春雨のめくみあまねき君か代にあはすはなにを玉のを柳（弄〇〇三六）

柳

〇〇二九 ※さはひめのいかにそめてかはるの野のあるよりも猶青柳の糸（弄〇〇三四）

〇〇三〇 春雨のふりそめしよりぬれてはすみとりもふかき青柳のいと（弄〇〇三五）

池柳

〇〇三一 むすひをくこほりもとけて池水のみとりはおなしあをやきの糸（弄〇〇三七）

〇〇三二 春くればこほりし池の浪かけてうつるもとくる青柳の糸（弄〇〇三八）

月前柳

〇〇三三 はる風の霞吹とく月かけによるとしもなき青柳のいと(弄〇〇三九)

賀茂にてわたくしの名所をあまた書出て人々歌よみし時、うへのきしといふ所名を  
たちいれて柳を

〇〇三四 釣たるゝ糸とや見ましかも河の浪よりうへのきしの青柳(弄〇〇四〇)

春曙

〇〇三五 瀧の上の浅野のきゝす鳴こゑもかすみにおつる春の明ほの(弄〇〇四一)

〇〇三六 心あらん人にやさらは難波かたみつとかたらんはるの明ほの(弄〇〇四二)

春月

〇〇三七 くれぬまは花のかゝみとなる水にくもりなはてそ春のよの月(弄〇〇四五)

※仏涅槃

〇〇三八※はしこそかけはくもらめきさらきやなかはの雲に有明の月(弄〇〇五一)

江春月

〇〇三九 もえ出る尾花かもとにかすむなりまのゝ入江の春のよの月(弄〇〇四九)

湖上春月

〇〇四〇 春の夜の月をうつせはかゝみ山かけさへくもる志賀の浦浪(弄〇〇五〇)

帰鴈帯春月

〇〇四一 声ちかく軒はをかけて行かりの数さへかすむ春の夜の月(弄〇〇五二)

春雨

〇〇四二 春雨のふりさけみれば三笠山木するゑはさしてぬるゝともなし(弄〇〇五三)

朝春雨

〇〇四三 板ひさしさすかにくもる明はのに風こまかなる春雨のそら(弄〇〇五四)

(一行分空白)

山家待花

〇〇四四 冬かれし草の庵も春くれは人めにそへて花そまたるゝ(弄〇〇五五)

〇〇四五 桜花さかはつけんと契りをきし我をとつれや人はまつらん(弄〇〇五六)

遠山花

〇〇四六 よそにみて花とはえこそいはねふみかさなる山のみねのしら雲(弄〇〇六六)

山花

〇〇四七※しら雲のたえす心にかゝるより嶺にも尾にも花の面影(弄〇〇五八)

〇〇四八 桜さく比としなれはしら雲に心かゝらぬ山のはもなし(弄〇〇五七)

尋花

〇〇四九 花ゆへはかゝるもよしやいたつらに行てはかへるみねのしら雲(弄〇〇六七)

〇〇五〇 ゆきてこそ花にまかはめ白雲のやへにかさなるをちこちの山(弄〇〇六八)

逢尋花

〇〇五一 わけてこし昨日の雲を花とみてけふはふもとに誰まよふらん(弄〇〇六九)

※花漸盛

〇〇五二※またきより立あふみねの白雲やさかりまつ間の花のおもかけ(弄〇〇七〇)

〇〇五三※咲残る木すゑをけふのしほりにてかへさはゝなに道やまとはん(弄〇〇七一)

〇〇五四※木すゑまで残らずあすやつもらまし枝に友まつ花のしら雪(弄〇〇七二)

名所花

〇〇五五 風をいとひうつるをおしみよし野山花にくらせる春の程なさ(弄〇〇七四)

〇〇五六 咲そめていく世かふるの山さくらうへけん春の色もかはらて(弄〇〇七五)

霞間花

〇〇五七 花のきるころものぬきのうす霞たえてみたるゝ春の山風(弄〇〇七六)

花映水

〇〇五八 花と見ておられぬ水やよし野なる夏箕の川の春の山かけ (弄〇〇七八)

※山花漸盛

〇〇五九※三輪山杉もまはらに成にけり春のしるしを花にゆつりて (弄〇〇七三)

山家花

〇〇六〇 世をいとふ軒はにちかき山桜花さく時そ人はまたるゝ (弄〇〇七七)

老見花

〇〇六一 咲にはふ花みる時そつれなくて世になからふるうさも忘るれ (弄〇〇六三)

宿花

〇〇六二※わかやとの一木の桜花さきぬめくみあまねき春の物とて (弄〇〇八〇)

〇〇六三 よそまてはいかゝ尋ねんまちまちし花の思はん宿の春風 (弄〇〇七九)

落花

〇〇六四 昨日まで朝けの雲と見し花の雨とふりゆくけふの夕くれ (弄〇〇八二)

〇〇六五 いづくまで行てうらみむ花ちらす風のやとりや庭の木のもと (弄〇〇八三)

〇〇六六 あらしふくみとりの苔のさむしろに花のにしきをかさねてそしく (弄〇〇八四)

〇〇六七 わすれてはちるをそおしむ花かたみめならふとしをあまたへぬれと (弄〇〇八五)

〇〇六八 なかめこし花のしほりも散はてゝかへるさまとふみよしのゝ山 (弄〇〇八六)

〇〇六九 よしの河風に岩こす花の浪こりるしみねの雲そなかるゝ (弄〇〇八七)

〇〇七〇 あすよりの春の心をいかゝせんたえてさくら跡なかりせは (弄〇〇八八)

〇〇七一 手もふれぬ宿の一木の花そともしらてやさそふ春の山風 (弄〇〇八九)

〇〇七二 我宿の花は木すゑにみえずとも庭のさかりをとふ人もかな (弄〇〇九〇)

〇〇七三 こゝろさへ花と友にやちりはてんよもの梢のうしろめたさに (弄〇〇九一)

〇〇七四 色をこそよそにまかへめちる花のにはひやいつらみねのしら雲 (弄〇〇九二)

〇〇七五 木すゑには花も残らず吉野河いはとかしはに春風そふく (弄〇〇九三)

〇〇七六 あはれいかに風のいたらぬ里もかなちるをならひの花とたにみん（弄〇〇九四）

落花留人

〇〇七七 ちる花の名残に人のとまらずは風にうらみのなをやつもらん（弄〇〇九五）

山落花

〇〇七八 花も今ちりて木すゑにあらし山人たのめなるみねのしら雲（弄〇〇九六）

山路落花

〇〇七九 みるかうちに花もうらみもつるなりさそふあらしの山のした道（弄〇〇九七）

山家落花

〇〇八〇 ちり行をおしむのみかは山さとは花ゆへにこそ人もとひけれ（弄〇〇九八）

落花帶月

〇〇八一 散つもるかたのゝ御野の花の雪木かけくもらぬ春のよの月（弄〇〇九九）

落花如雪

〇〇八二 昨日まで雲とみえしはよしの山けさふる花の雪けなりけり（弄〇一〇〇）

関路落花

〇〇八三 かきりありて花はちるともせめてさは匂ひをとめよあふさかの関（弄〇一〇一）

惜花

〇〇八四 あかてちる花のかたみそとはかりにきゆるはおしき嶺のしら雲（弄〇一〇三）

〇〇八五 ※かきりあれは心と花のちるを猶いそくはつらき春の山風（弄〇一〇四）

〇〇八六 春風にわか身をなさはよしの山花のあたりやよきてふかまし（弄〇一〇五）

水上落花

〇〇八七 立かへりむすふもあかすちる花のしつくなからの山の井の水（弄〇一〇二）

花隔月

〇〇八八 袖にさへ匂ひをそへて春の夜の月にさはらぬ花のしら雲（弄〇一〇一）

(一行分空白)

三月三日祝の心を

〇〇八九 君そみんなよひの今日のもゝとせをみそちの春の花やひらくと (弄〇一〇六)

帰鷹

〇〇九〇 ※なれかゆく北のおきなのことくさよかへらすとても春のかりかね (弄〇一一七)

〇〇九一 なかめをくる跡も波路にかへる鷹かすめる空の面かけそたつ (弄〇一二二)

〇〇九二 いとひこし越路の雪にまかへてやみやこの花にかへるかりかね (弄〇一二七)

〇〇九三 立かへり花のさかりをつげんとや契りこしちの春のかり金 (弄〇一〇八)

〇〇九四 さく花の色に心をそめしとやこしちにこそく春の鷹かね (弄〇一〇九)

〇〇九五 一春はかへらてもあれ天つ鷹都の花に物わすれして (弄〇一一〇)

〇〇九六 秋またはこんとたのめよ立わかれないなはの山の鷹の一声 (弄〇一一一)

〇〇九七 名残なく霞をわけてかへる山今やなくらんこしの初かり (弄〇一二二)

〇〇九八 かきりなくこしちの春やしのふ山つはさみたれてかへるかりかね (弄〇一一三)

〇〇九九 秋霧を分こし空のしほりにてかすみにかへる春のかり金 (弄〇一二四)

〇一〇〇 さかはまつつけんとちきる玉つさを花にかけてや帰るかりかね (弄〇一一五)

〇一〇一 帰るかりさらはつはさにかをとめて花なき里の家つとにせよ (弄〇一二六)

浦帰鷹

〇一〇二 志賀の浦や波路もかすむおほ空に遠さかり行春のかりかね (弄〇一二〇)

〇一〇三 ※かゝみ山かすみにうつる鷹金のかけさへ帰る志賀の浦波 (弄〇一二二)

関路帰鷹

〇一〇四 跡たにもうつしとゝめよ行かりの霞にきゆるものせきもり (弄〇一二三)

水辺紫藤

〇一〇五 時わかぬ水のみとりもむらさきの色にはあへす池の藤なみ (弄〇一二三)

※社頭藤

○一〇六※にくしとや神はみるらんむらさきの藤なみかゝるあけの玉垣（弄〇一三二）

藤花随風

○一〇七 にははすはそれともしらし花さかり風に波よる多枯のうら藤（弄〇一三三）

款冬

○一〇八 ゆるすそとあるしはいはぬ色なからおらてはえこそやま吹の花（弄〇一三四）

野若草

○一〇九 わか草の野へのみとりをみてもまつ心の駒をとりやつなかむ（弄〇一三五）

雲雀

○一一〇 野後拾 かけつす野沢の水の底みれはあかるもしむ夕ひけぬ 梅大納言忠光  
春ふかき野沢の水の夕日影あかるひはりの声しつむ也（弄〇一三六）

暮春

○一一一 花ちりし春の日数もくれ竹のふしみの里そいとゝあれゆく（弄〇一三九）

○一二二 たかやとにわきて心をとゝむらんおしむはおなし春のわかれち（弄〇一四〇）

拾遺集の中の一句を題にて

○一二三 行春をいつかはそらにせきとめしあやなし霞たつ名はかりは（弄〇一四二）

○一二四 春さへやゆくゑもしらす暮ぬらん花ちらす風のおなしやとりに（弄〇一四一）

喚子鳥

○一二五 行春をたちとまれとかよふこ鳥なかき日くらしねをはなくらん（弄〇一三八）

三月尽夕

○一二六 行春のなこりもつきぬ今はとてけふの日かけも入あひの鐘（弄〇一四三）

※追加次第有

※春河

○一二七※あらはれてふたゝひ春の名取河波の花さく瀬ゝのむもれ木（弄〇一四四）



※遠山花

〇一八※花とたに見つゝをらん伊駒山みねの嵐よ雲なちらしそ（弄〇一二六）

行路落花

〇一九 さのみ又さそひなはてそちりかゝる袖なを匂ふ花のした道（弄〇一二七）

〇二〇 かへるさの家路もとをしちる花にしつ心なき春の夕風（弄〇一二八）

〇二一 今日そ我老もかくるゝ山さくらちりかひくもる花のした道

故郷花

〇一二二 いにしへの春を残してふる郷のかたみに匂ふ志賀の花その（弄〇一三〇）

行路早蕨

〇一二三 おらてはた行過かたき玉はこの道さまたけの初わらひかな（弄〇一三七）

羈中花

〇一二四 ゆくさきもかへらんかたもわすられて花にくらせる春の山もと（弄〇一二九）

残花

〇一二五 暮てゆくはるのかたみやおく山のみとりに残る花の一枝（弄〇一四九）

（一〇行分空白）

夏

更衣

〇一二六 ぬきかへてにほひもなつの朝もよひきつゝなれにし花の衣手（弄〇一四六）

〇一二七 けふきても思ひそかへす夏衣はるは昨日のゆめやみゆると（弄〇一四七）

※尋余花

〇一二八※行てこそ花にまかはめ若みとり青根かみねに残るしら雲（弄〇一五〇）

※新樹雨

〇一二九※露にぬれてあるよりも猶青によしならの若葉に過るむら雨（弄〇一五四）

新樹

- 一三〇 花にそめし心の色もなつ山にうつれはかはるわかみとり哉（弄〇一五一）  
 ○一三一 朝な朝なちりにし花のおもかけに立そふ木々の若みとり哉（弄〇一五二）

新樹風

- 一三二 花ちりし青葉の山に吹風のやとりすゝしき夏木立かな（弄〇一五三）  
 ○一三三 風のをとほまたきに夏の日影山さすか涼しきならの葉かしは（弄〇一五五）

葵

- 一三四 あふひとるころもの露の玉くしけ二世をかけて身にや祈らん（弄〇一五六）

※閏月葵

- 一三五※ことしたに卯月かさなる二葉草あかすやかけん君かやちよを  
 ○一三六※今日も又おなしう月の日影草かけてふたゝひ世をやいのらん（弄〇一五七）

卯花

（一行分空白）

郭公

- 一三七※時鳥なきゆく空の一声にいく里人をおとろかすらん（弄〇一六〇）  
 ○一三八 しひねはさそな卯月の時鳥思ふにまけよ夜半の一声（弄〇一五八）  
 ○一三九 ほとゝきすさ月はまたき我宿の軒のしのふにねをならへてよ（弄〇一五九）

※暁待時鳥

- 一四〇※ほとゝきすよそけにきくやあかつきの八こゑの鳥は時もたかへず（弄〇一六九）

待郭公

- 一四一 有明の山ほとゝきすあやにくにまつとしりてやなれもつれなき（弄〇一六三）  
 ○一四二※人をわくならひなりせは郭公またて中々ねなまし物を（弄〇一六四）  
 ○一四三※こよひさはまたてやみねと時鳥雲るにつくるひとこゑもかな（弄〇一六五）

〇一四四※あやにくにまつとしりてやなかさらんさてやはつるに山ほとゝきす（弄〇一六六）

〇一四五　しのひねを一こゑもらせほとゝきす庭の木のまの月更ぬとき（弄〇一六七）

〇一四六　雲間ゆく月影もよしほとゝきすこてふに似たりむらさめの空（弄〇一六八）

初聞郭公

〇一四七　わかための初音ならしを時鳥まちえかほにや人にかたらむ（弄〇一七〇）

〇一四八　初音とはしるもしらぬもあふ坂の山ほとゝきすきゝかすくらん（弄〇一七一）

〇一四九　我ならておなし初音をほとゝきすまたぬね覚に誰か聞らん（弄〇一七二）

〇一五〇　外によしなかはなくともほとゝきす我きく時を初音とそきく（弄〇一七三）

〇一五一　鳴ゆくはおなし雲るのほとゝきすいく里人のはつ音なるらん（弄〇一七四）

〇一五二　よそながら我身もきゝつ郭公よしたかための初音なりとも（弄〇一七五）

郭公一声

〇一五三　時鳥そらになき行一こゑをわか初音とや人にかたらん（弄〇一七六）

山郭公

〇一五四　さ月きてふしのねになくほとゝきす時しらぬ雪はさもあらはあれ（弄〇一七七）

尋郭公

〇一五五　たつねきて山ちにくれぬ郭公かへさはをくれ夜半の一声（弄〇一六二）

里郭公

〇一五六　村雨の過ると山のほとゝきすこゑを待とるしからきの里（弄〇一七八）

夢中時鳥

〇一五七　このねぬる夢に聞しをほとゝきす思ひあはする一こゑもかな

〇一五八　きゝつやと枕にとへはほとゝきすわか思ひねの夢の一こゑ（弄〇一八四）

〇一五九　ほとゝきす夢に聞つる一声のなこりもさそな夏のよの月（弄〇一八五）

雨中郭公

○一六〇 今たにもひまなくきなけほとゝきすこやのしのやの五月雨の比(弄〇一七九)

五月五日時鳥

○一六一 ふきわたす軒のあやめのひまをあらみなかねをそへよ山時鳥(弄〇一九二)

羈中郭公

○一六二 もろともに夜ふかく出てほとゝきすなくねは夢かうつの山こえ(弄〇一八〇)

渡郭公

○一六三 まこもかる淀のわたりの時鳥なくねみしかき夜半の一声(弄〇一八一)

※晝聞時鳥

○一六四 ありあけの月のかつらの空たかく鳴や日影の山ほとゝきす(弄〇一八二)

○一六五 ほとゝきすそらに鳴行一こゑは数ならぬ身のね覚とふとか(弄〇一八三)

盧橘薫枕

○一六六 風かよふ枕にちかきたち花のむかしにゝほふ夢をみしかき(弄〇一八九)

※夜橘

○一六七※よもすからむかしの人の袖のかをおもへはちかき軒の立花(弄〇一九〇)

早苗

○一六八 千町田におりたつ田子の手もたゆく君かよはひの数やとらん(弄〇一九二)

○一六九 けふはまつみとしろ小田にしめはへて神の心をとるさなへかな(弄〇一九三)

夕早苗

○一七〇 残りつるそしろのさなへとりもあへす袖ふきかへす田子の夕風(弄〇一九四)

(二行分空白)

五月雨

○一七一 ふきそへし草もしのふにさみたれのあやめわかれぬ軒の玉水(弄〇一九五)

○一七二※夏かりの声のこや野の五月雨にくちやはてなんほすひまをなみ(弄〇一九六)

(一行分空白)

河五月雨

○一七三※朝夕にわたりなれたる山川のそこさへたとる五月雨の比(弄○一九九)

○一七四 飛鳥川かはる洩<sup>は</sup>せも名のみしておなしみかさの五月雨のころ(弄○一九八)

関五月雨

○一七五 あふ坂の関のゆきゝもいかならん空さへとつるさみたれの比(弄○二〇〇)

五月雨久

○一七六 みかくれてかつみし草も程ふりぬあさかの沼の五月雨の比(弄○二〇一)

五月雨晴

○一七七 今日いくかみさりしみねの夕附日さすかはれゆく五月雨の空(弄○二〇二)

述懐哥中におなし心を

○一七八 五月雨の空もかきりはある物を心のやみのいつかはるへき(弄○二〇三)

※水鶏

○一七九※さ<sup>さしも</sup>のみなと心<sup>かく</sup>みしかき水鶏かなたゝかすとても明やすきよを(弄○二〇四)

蛭

○一八〇 さすか猶ゆくかたみせて吹風にきえみきえすみ行<sup>と</sup>はたるかな(弄○二〇五)

○一八一 みしかよの月待はとの夕やみに道もとらてゆく<sup>と</sup>はたるかな(弄○二〇六)

月前蛭

○一八二 月影にぬるゝかはなるならの葉の光をそへてとふ蛭哉(弄○二〇七)

叢端蛭

○一八三 とらは手にとりもこそせめ思ひ草葉末の露に蛭とふ影(弄○二一一)

○一八四 あふひ草をのか光になひくやと夕露かけてゆく<sup>と</sup>はたるかな(弄○二一二)

※水辺蛭

○一八五※山の井に影をうつしてむすふ手のしつくを友ととふはたるかな（弄○二〇九）

螢火秋近

○一八六 秋ちかき森（せの森）の木の間に（の）なかれきてあるかなきかにとふはたる哉（弄○二一五）

※螢火近枕

○一八七※難波江やあしのうきねの波枕なれもみたれてゆくはたる哉（弄○二二三）

○一八八※吹とをすはしるの風にさそはれて枕にきゆるよはの夏むし（弄○二二四）

窓外螢

○一八九 身をてらすすひかりをみせてをのつからあつめぬ窓にとふ螢かな（弄○二〇八）

※螢映水

○一九〇 暮はてし野沢（の）の草の露の色を二たひみせてとふはたる哉（弄○二一〇）

閨中扇風「松殿にて当座二首内」

○一九一 さよふけてならすあふきの涼しさやよそにしられぬねやの秋風（弄○二二七）

納涼

○一九二 たくれの雲のはやし（の）のすゝしきは吹かふ風やちかき川なみ（弄○二二四）

河納涼

○一九三※あつさはよそになかすかよそに夏箕川入日もさすか山かけにして

○一九四 結びよる袂すゝしき夏箕河くるゝもはやし山かけにして（弄○二二五）

水辺納涼

○一九五※涼しやとかつ見なからに日くるともむすはてはなと山の井の水（弄○二二七）

○一九六 夏とたに岩かき清水むすふ手のしつくにかよふ秋の初風（弄○二二六）

野夕立

○一九七 ゆふたちのいくめぐりしてむさしのゝ草葉の露はをきわたすらん（弄○二一八）

夏月

〇一九八※半空の雲よりあくる夏の夜は月ゆへつらき山のはもなし（弄〇二一九）

〇一九九 をくりいるゝ心の末も半天にゆくかたとをしみしかよの月（弄〇二二一）

〇二〇〇 西になるほとこそなけれかつらきや豊等の寺のみしかよの月（弄〇二二〇）

※河夏月

〇二〇一※石川やはなたのおひの結ふ手にうつるもさそなみしかよの月（弄〇二二二）

虫声秋近

〇二〇二 そこはかとなきかはしぬる虫のねもまかきにちかき庭の秋風（弄〇二二八）

六月祓

〇二〇三 みそきするみたらし河のゆふたすき秋をかけたる風のすゝしさ（弄〇二三二）

〇二〇四 御祓してかへさすゝしき河やしろしのひにかよふ袖の秋風（弄〇二三三）

六月尽

〇二〇五 あしかきのこよひ一よをへたてにてまちなりぬ秋の初風（弄〇二三五）

夕顔

〇二〇六 煙にもすゝけさりけり難波人あし火たくやにさける夕かは（弄〇二三九）

夏夜

〇二〇七 人まつと人やみるらん夏のよの風にいさよふ楨の戸口を（弄〇二二三）

（四行分空白）

秋

立秋

〇二〇八 昨日たに涼しきせみの羽衣にかさねて秋の風やたつらん（弄〇二三六）

〇二〇九 今朝よりそ身にしむ風の初せ河波の心に秋やたつらん（弄〇二三七）

初秋風

〇二一〇 をとたてついなさゝ原そよされは思ひしことそ秋の初風（弄〇二三八）

- 二二一 行末のとまりはしらす秋風の露のやとりや庭の萩原（弄○二三九）
- 二二二 みか月のほのかにうつる草の露にさやかならねと秋の初風（弄○二四〇）  
 夢想の卅一字をわけて、り文字をかしらにて同じ心を
- 二二三 律の音に今日より波もしらむらしてうしの崎の秋の初かせ（弄○二四四）  
 七夕
- 二二四※秋くれはあふよをちかみ七夕の心やなをも空に成らむ（弄○二四五）
- 二二五 たなはたの空にそしるきいつはりのなき世にちきる秋の一夜は（弄○二四六）
- 二二六 七夕にかさねはうとしはつ秋のまたひとへなる苔の衣手（弄○二四七）
- 二二七 まれにあふ契りなからも天の川紅葉の橋はたゆる世もなし（弄○二四八）
- 二二八 人の世にみればこそあれ天の河一夜もかれぬあふせなるらし（弄○二四九）  
 七夕鹿
- 二二九 こよひとて妻やこふらんをのれさへふたけの鹿のはし合のそら（弄○二五二）  
 七夕瑤琴
- 二二〇 天の川波のをすけし玉ことの音にひかれてや船出しぬらん（弄○二五三）  
 七夕契
- 二二一 天川たえぬをふかきちきりとやわたし初けんかさゝきの橋（弄○二五〇）  
 七夕後朝
- 二二二 わかれては又やあふせのとをからんきのふにかへれあまの河波（弄○二五二）  
 萩
- 二二三 なをさりに秋とはかりやをとすらんかやか軒はの萩の上風（弄○二五四）
- 二二四 百とせもなかはに過る秋きぬと猶おとろかす萩のうは風（弄○二五五）
- 二二五 萩のはにふくとはかりや聞てまし身にしめとは風もふかしを（弄○二五七）  
 ※萩風



萩

〇二二六 なひきあふお花か袖にく露も色をうつせは萩か花すり (弄〇二五八)

萩露

〇二二七 をそくとき花やそむらん萩か露をくれさきたつ鴈のなみたに (弄〇二六〇)

〇二二八 吹しはる葛葉にまじる萩かつゆちらすは風のうらみのみかは (弄〇二六一)

※野草

〇二二九※さらぬたに心とまる秋の野にお花の袖の誰まねくらん (弄〇二六三)

野萩

〇二三〇 宮城野の秋を思へは今もなを心にうつる萩か花すり (弄〇二六四)

秋夕

〇二三一 秋風は山より野より吹たちぬよしやたへてん宿のゆふくれ (弄〇三二八)

秋の夕暮をはてにてあまたよみし歌

〇二三二 大かたの世のうきことは身になれぬなれてもうしや秋の夕暮 (弄〇四七七)

〇二三三 いかにせん風を待まの露の世にきえぬうき身の秋の夕暮 (弄〇四七八)

〇二三四 そのことと思ひもわかつてなかむるはいかなる色そ秋のゆふ暮 (弄〇四七九)

〇二三五 とにかくになかめよとてや露を草涙を袖の秋の夕暮 (弄〇四八〇)

〇二三六 萩の葉に過ゆく風の音ならてとへかし人の秋の夕暮 (弄〇四八一)

〇二三七 有馬山いなさふきいなどてもいつちゆかまし秋の夕暮 (弄〇四八二)

〇二三八 さひしさのなかめにたへぬうたゝねよおやのいさめし秋の夕暮 (弄〇四八三)

〇二三九 よしの山いるへき春のあらましもうつれはかはる秋の夕暮 (弄〇四八四)

〇二四〇 人めなき草のいほりの三の道それさへあるゝ秋の夕暮 (弄〇四八五)

〇二四一 さひしさにむかへはいとゝますかゝみしらぬおきな秋の夕暮 (弄〇四八六)

〇二四二 しらつゆの玉田よこ野になくむしのねにこそたてね秋の夕暮 (弄〇四八七)

○二四三 をく露もうつらの床に深草の里をはかれぬ秋の夕暮（弄○四八八）

○二四四 池水のいひこそしらね津の国のこや物おもふ秋の夕暮（弄○四八九）

○二四五 色もかもさのみ心にそむなとは人にそいひし秋の夕暮（弄○四七六）

○二四六 世をいとふならひはさそとおもふ身にあまりさひし秋の夕暮（弄○四九〇）

○二四七※桜ちる春は思ひもなかりけり露ふく袖の秋のゆふ風（弄○三二九）

○二四八 身ひとつのうきにも人のつらさにもあらぬおもひよ秋の夕暮（弄○四九一）

山家秋夕

○二四九 そむきこしかひこそなけれ夕くれの秋にしられぬかくれ家もかな（弄○三三〇）

薄

○二五〇 野をとをみ分るゆふへの花すゝき入日をまねく袖の秋風（弄○二六九）

○二五一 しら露をたもとににかけて花すゝきゆふへゆふへにたれまねくらん（弄○二七〇）

○二五二 あさな夕なしほるゝ露の花薄たか秋風にぬるゝたとそ（弄○二七一）

女郎花

○二五三 誰としもならひの岡のをみなへしよことにむすふ露の契りそ（弄○二七二）

（三行分空白）

※夕鹿

○二五四※をくら山夕こえくれて宿とへは紅葉ちりしき小鹿なく也（弄○二七九）

鹿

○二五五 時しもあれをのか妻とふ山のはに月も入野のさをしかの声（弄○二七八）

夜鹿

○二五六 なきあかすをしかも妻にあはゝこそ秋の夜なかきかひよと思はめ（弄○二八〇）

山鹿

○二五七 たえずきく音羽の山に鳴鹿はせきのこなたに妻やかよはぬ（弄○二八一）

○二五八 わけて入露さむからしあつさ弓をしか妻とふ矢野の神山（弄○二八二）

野鹿

○二五九 あま衣つまやまとをに成ぬらむ須まの上野にをしか鳴なり（弄○二八三）

○二六〇 さをしかの心にしめてむらさきの根はふよこ野に妻や恋らん（弄○二八四）

○二六一 秋の色も末の原野の花すゝきはに出て今やしかも鳴らん（弄○二八五）

○二六二 妻こひてなかね夜もなし今日いくかあはてふる野の棹鹿の声（弄○二八六）

浦鹿

○二六三 なひくらんお花か浪による鹿のこゑ吹をくるまのゝうら風（弄○二八七）

海辺鹿

○二六四 あはちしま波よりをちの鹿のねをあはと聞てや過る船人（弄○二八八）

月前鹿

○二六五 今こんと妻や契りし有明の月のさやまにをしか鳴なり（弄○二八九）

海路聞鹿

○二六六 さよふくる汀の波をふく風にしかのねこゆるすゑの松山（弄○二九〇）

※鷹

○二六七※聞からに涙もよはす暁の袖におちくる初鷹のこゑ（弄○二七四）

夜鷹

○二六八 衣手の露さむからし鳴わたるかりほの庵の秋のねさめに（弄○二七五）

雲間鷹

○二六九 しら雲の跡なき声や天の川水にかすかく鷹の玉つき（弄○二七六）

海辺鷹

○二七〇 とまるへき空の行ゑもしら波にゆらのとわたる秋の鷹かね（弄○二七七）

虫

○二七一 おもふことやをのかさまさまかはらむおなしねになくむしのこゑこゑ(弄○二九五)

蕪

○二七二 ※きりきりす鳴ねはいさや秋のよのふかきよもきかしたの心よ(弄○二九七)

○二七三 ともし火をそむけてむかふかへに又しつこゝろなくきりきりす哉(弄○二九六)

松虫

○二七四 ときは山ふもとの野へのあはれさも今一しほの松むしのこゑ(弄○二九八)

鈴虫

○二七五 ふり出てねにこそたてね身のうさは我やはをとる夜半の鈴虫(弄○二九九)

虫声漸衰

○二七六 秋ふかき野への時雨にぬれつゝも今いくかとかむしのなくらん(弄○三〇〇)

河霧

○二七七 立田川かはせの霧に中たえて月のこほりをわたる秋風(弄○三〇三)

海辺夕霧

○二七八 霧はれて夕日うつろふ波間よりみなとにいそく舟つとふ也(弄○三〇四)

秋田 「賀茂私名所哥中 村雲 杜下」

○二七九 ※晴くもるいなはの雲のたえたえに月もかたよる秋のさよ風(弄○二九三)

○二八〇 梢より空にしられぬむら雲や月の夜田かるもりのしたかけ(弄○二九四)

擣衣

○二八一 ※天川波にひゝきて聞ゆなり雲の衣や空にうつらん(弄○三〇六)

○二八二 風さむき梢に残る秋のせみに声をならへてうつ衣かな(弄○三〇五)

○二八三 秋ふかきこやのわたりに風さえていつちうつらん夜半の衣手(弄○三〇七)

○二八四 誰宿のきぬたの音そよもすから身のうき数をよそにしらせて(弄○三〇八)

○二八五 衣うつ人こそあらめよそになとうきをかそへていねかてにする(弄○三〇九)

〇二八六 夜をさむみ秋さり衣うちつけにきくより袖の風そ身にしむ (弄〇三一〇)

〇二八七 橋ひめのかたしく波に月さえてうちもやすまぬよはの衣手 (弄〇三一〇)

〇二八八※よはにうつ同じきぬたのをとしも心々にきゝかわくらん (弄〇三一二)

擣衣遠近

〇二八九 をちこちにおなしきぬたの聞ゆるはあらしやよもに吹かはるらん (弄〇三二三)

擣衣所々

〇二九〇 袖ごとに霜やをくらんうちわたすをちかた人の秋のころもて (弄〇三二四)

海辺擣衣

〇二九一 須磨のあまの塩やき衣波かけてうつをとさへやまとを成らん (弄〇三二五)

旅泊擣衣

〇二九二 よせてうつ衣の浦の波まくらいとゝうきねの夢そくたくる (弄〇三二六)

関路擣衣

〇二九三 月にうつ夜半の衣の関守やとてもねられぬささひ成らん (弄〇三二七)

浦擣衣

〇二九四 ひるのいとまをしまのあまの袖にしも月をやとしてうつ衣哉 (弄〇三二八)

〇二九五 すまの浦や秋のよさむにやく塩のたれとまとをの衣うつらん (弄〇三二九)

晝擣衣

〇二九六 をのつから更るもしらてあかつきのかねうちそふるしつか衣手 (弄〇三三〇)

里擣衣

〇二九七 衣うつかたのゝ里のさむき夜を空につたふる天の川風 (弄〇三三一)

〇二九八 夜をさむみうちもたゆますから衣みえりの里につまや恋らん (弄〇三三二)

〇二九九 衣うつをとへたてすあしかきやまちかき里にかよふ秋風 (弄〇三三三)

〇三〇〇 たかやとの夜半のすさひそ秋しのやと山の里に衣うつこゑ (弄〇三三四)

〇三〇一 いとゝ猶うちもねられず此比のよきむかさなる衣手の里（弄〇三二五）

〇三〇二 もろこしのよしのゝ里もよをさむみやまとはあらぬ衣うつらし（弄〇三二六）

月前擣衣 「九月中比阿波にて」

〇三〇三 秋ふかくなりにつけらしも里のあまの塩なれ衣月にうつこゑ（弄〇三二七）

（四行分空白）

月

〇三〇四 衣手にふりつむ秋の雪とみてはらへはおちぬ袖の月影（弄〇三三一）

〇三〇五 花ならぬ木するも春はましりにきよしのゝ山の秋のよの月（弄〇三三二）

山月

〇三〇六 志賀の山こえてや月も出ぬらんむかしなからの影をみよとて（弄〇三三四）

〇三〇七 ※花ならぬ岩戸あけし光もさをな雲はるゝそのかみ山に出る月影（弄〇三三五）

野月

〇三〇八 風さむみ都にかよふ夢路さへ遠里小野の秋のよの月（弄〇三三六）

河月

〇三〇九 月かけのそこすみわたる山川にふかきあはれをなとうかふらん（弄〇三三七）

江月

〇三一〇 影きよみ内外もわかすをしてるやよさの入江の秋のよの月（弄〇三四〇）

〇三一〇 夜もすから空住の江にみる月の落ても水のあはち島山（弄〇三三八）

〇三一二 住の江の浪ちはるかに月さえてよるさへみゆるあはちしま山（弄〇三三九）

嶺月

〇三二三 面影を一本の松にさきたてゝみねにいさよふ秋のよの月（弄〇三四一）

渡月

〇三二四 いささらは佐野のわたりに庵しめて秋のよなかき月をやとさん（弄〇三四二）

〇三二五 よもすから露に宿かる三輪か崎さのゝわたりの秋の月かけ（弄〇三四三）

滝月

〇三二六 滝のいとにむすふひかりを白玉か何そととへは秋の夜の月（弄〇三四四）

※関路月

〇三二七※木間もる月かけくらしこれや此心つくしの関の杉むら（弄〇三四六）

古寺月

〇三一八 かつらきや雲間に出る月かけはあらしやよそのひかりなるらむ（弄〇三四五）

窓月

〇三一九 晴くもる雲も空にはなよ竹の風にをきふす窓の月影（弄〇三四七）

旅宿月

〇三二〇 月影もおなし空とはおもほえす都わかれし袖のなみたに（弄〇三四八）

船中月

〇三二一 いつくにかさして行らん難波江やつなかぬ船にやとる月影（弄〇三四九）

八月十五夜

〇三二二 こよひ又月のかつらをかけそへてひかりことなるかものみつかき（弄〇三五〇）

〇三二三 空たかく数さへ見えて飛とりのあすかけぬへき月の名もおし（弄〇三五二）

〇三二四 わきて猶こよひ雲るに高き名の月にはおよふことのはそなき（弄〇三五三）

〇三二五 底きよみこよひそ月の名取河せゝの埋木かけあらはなり（弄〇三五四）

〇三二六 石清水いけるをはなついろくつの月にひれふる数やみゆらん（弄〇三五五）

〇三二七 こよひてふ難波によする初塩の月さへ空にみつものうら風（弄〇三五六）

〇三二八 逢坂をこえてや駒もいさむらんこよひ雲るの月にひかれて（弄〇三五七）

（四行分空白）

宇治にて八月十五夜

〇三二九 百とせを我もなかはの秋になと心の月はみつとしもなき（弄〇三五八）

九月十三夜

〇三三〇 こよひなと名におふ月をいたつらに過すならひそろこの空（弄〇三六五）

※大坂にて

〇三三一 ※十日あまりみつのとまりに雲はれて名にはたかはぬ秋のよの月（弄〇三六六）

西方述懷哥中に月を

〇三三二 月影<sup>（きし）</sup>をなかつとなれは人ことに西に心を送らぬはなし（弄〇三五九）

〇三三三 霧<sup>（き）</sup>ふかきつみなくてもななめはや西にさすらふ秋のよの月（弄〇三六〇）

〇三三四 なかめきて老とはなりぬよしさらはそなたにさそへ山のはの月（弄〇三六一）

〇三三五 あみた仏と更ゆく空になふれは月も心も西にこそなれ（弄〇三六二）

〇三三六 木の間もる月の光をみてもまつ心つくしのかたそ恋しき（弄〇三六三）

〇三三七 心すむ夢をたにみん月影のかたふくかたに枕さためて（弄〇三六四）

（一行分空白）

九月十三夜阿波国渭津にて

〇三三八 あはとのみつねになかめし月かけのこよひはいかにあはち島もり（弄〇三六七）

秋旅

〇三三九 枕とて風のやとりをかるかやのみたれてむすふ夢そつゆけき

〇三四〇 今朝はたれをきて行らん草の露むすふ枕に夢を残して

〇三四一 秋風に露ちるをのゝ草まくらむすふもはかなふる郷の夢

菊露

〇三四二 咲にはふほとたにのこれ千世ふへききくのまかきにをける白露（弄〇三六九）

菊漸移



○三三三 朝な朝な秋の日数のほとなさもうつろふ色にしらきくの花 (弄○三七〇)

九月始つた住吉社にまうてし時」

○三四四 おりしもあれ秋の海へに鴈の声きくの花さく住よしのはま (弄○三六八)

※杜間紅葉

○三四五 龍田山しくるゝ松の木間よりくれなるゝる嶺のもみちは (弄○三七三)

黄葉

○三四六 立田姫けふ一しほの木すゑそといはてもしるき口なしの色 (弄○三七一)

紅葉

○三四七 外よりも色こそまされみとりなる松にならひの岡の紅葉は (弄○三七二)

紅葉浮水

○三四八 たつ田ひめ染てほとなきもみちはのにしきをあらふ山川の水 (弄○三七四)

暮秋

(一行分空白)

九月尽

○三四九 行秋をおしむ涙やあすよりの袖にしくるゝはしめなるらん (弄○三七五)

※秋夕

○三五〇 ※おほかたの世のうきことはとしをへて思ひしら<sup>しり</sup>すや秋の夕暮 (弄○五一六)

○三五一 ※そことししらぬ山路の鳥の声それさへさひし秋の夕暮 (弄○四九二)

○三五二 ※何事もあらずなりゆくむかしより面かはりせぬ秋のゆふ暮 (弄○四九三)

○三五三 ※なかゝれと身をいのりしはかきりなくなかめむためか秋の夕暮 (弄○四九四)

○三五四 ※ならはしの物ともいし身はすてに六十にあまる秋の夕暮 (弄○四九五)

○三五五 ※空たかくつらにをくるゝ鴈の声をたによきよ秋の夕暮 (弄○四九六)

○三五六 ※としのなめせしまにいつしかと身は七そちの秋のゆふくれ (弄○五二七)

- 三五七※海土衣なれはまさらてあしのやのなたの塩やの秋の夕暮（弄○四九七）
- 三五八※波のをとにたへてやすまのあま衣かゝる所の秋のゆふくれ（弄○四九八）
- 三五九※露けさのさこそはあらめ旅ころもなれぬる里の秋の夕暮（弄○四九九）
- 三六〇※思ひやるかひもあらしなさひしさはひとりとりか秋のゆふくれ（弄○五〇〇）
- 三六一※身ひとつのうきにかきらはいかならんむかしもさそな秋の夕暮（弄○五〇一）
- 三六二※うきことにさすかたへつゝむかしよりいくなかめしつ秋の夕くれ（弄○五〇二）
- 三六三※わきてなとなかめわふらんこれも又世のことはりそ秋の夕暮（弄○五〇三）
- 三六四※とにかくに世はうき物をなからへてよしなやされは秋の夕暮（弄○五〇四）
- 三六五※ところせく咲ちる花の春はあれとよしやよしのゝ秋の夕暮（弄○五〇五）
- 三六六※さひしともうしとも何かいける身に心あれはそ秋の夕暮（弄○五〇六）
- 三六七※行ゑたにしらぬ野山にあくかれて故郷とをき秋のゆふくれ（弄○五〇七）
- 三六八※何ゆへに世をのかれこしわか身そと思へはこそあれ秋の夕暮（弄○五〇八）
- 三六九※山里の軒はにちかき松杉も霧たちこむる秋の夕暮（弄○五〇九）
- 三七〇※さすか又まきるゝかたも有なまし我宿からの秋の夕暮（弄○五一〇）
- 三七一※まれにきてとふ人かへるさひしさのわか身に残る秋の夕暮（弄○五一一）
- 三七二※さひしさも老てはいとゝ見し人のなきか数そふ秋の夕暮（弄○五一二）
- 三七三※まれにきて問人もなき山里のあるしかはなる秋のゆふくれ（弄○五一三）
- 三七四※柴の戸の垣ね飛かふむらすゝめをのか色さへ秋のゆふくれ（弄○五一四）
- 三七五※浦とをくゆきゝの船もこき過て跡なき波の秋の夕暮（弄○五一五）
- 三七六※誰にうれへ何にかこたんなかむれはそのことゝなき秋の夕暮（弄○五一七）
- 三七七※残りなくおもひも露も身にあまる袖より外の秋の夕暮（弄○五一八）
- 三七八※忘れてはさひしと思ふ六十あまり身はことほりの秋の夕暮（弄○五一九）
- 三七九※はしめよりむなしき道をさとりえてことなしふとも秋の夕暮（弄○五二〇）

- 三八〇※いかなれは身はかくしもかしもなから心そらなる秋の夕暮（弄〇五二一）  
 ○三八一※さひしさのまきるゝかたやと思ふまにこゝろそやかて秋の夕暮（弄〇五二二）  
 ○三八二※うしといひあはれといふも身をおもふ心のはかの秋の夕暮（弄〇五二三）  
 ○三八三※山里にくらへくるしきさひしさの世のうきよりは秋の夕暮（弄〇五二四）  
 ○三八四※さひしさのゆへたにしらす人のうへのことならなくに秋の夕暮（弄〇五二五）  
 ○三八五※仙人もいかにたへては過しけん九千年の秋のゆふくれ（弄〇五二六）  
 ○三八六※老らくのくるをもいさやしら露の玉まく葛の秋のゆふくれ

（一行分空白）

冬

初冬時雨

- 三八七 神無月空にしくるゝことはりやさためなき世のまことなるらん（弄〇五二八）

暁時雨

- 三八八 はれくもる影もさためすむら時雨ふるからをのゝ有明の月（弄〇五三〇）

閏十月一日時雨ふりければ

- 三八九 けふや又衣はかへん神無月かさねて袖にふるしくれかな（弄〇五三一）

庭落葉

- 三九〇 うすくこくそめし時雨のあやなくも庭にかたよる木ゝの紅葉ゝ（弄〇五三二）

- 三九一 ちりまよふもみちを庭に吹ためてよその時雨をみする山風（弄〇五三三）

落葉浮水」

- 三九二 ちり残る紅葉も今はなつみ川秋のとまりを山陰にして（弄〇五三四）

山家落葉

- 三九三 風にちるみねの木葉をしはし猶軒はにみするさゝかにの糸（弄〇五三五）

残菊

○三九四 神無月朝をく霜の色見えてうつろひけりな庭のしら菊（弄○五三六）

○三九五 冬きては人めもかるゝ山里の草をよそけにのこるしらきく（弄○五三七）

冬田

○三九六 こなきおふるかり田のひつちひこはへてすゝめかくれに又なりにけり（弄○五三九）

※霜下菊

○三九七※朝ことにうつろふ霜の色そへて秋よりのちの秋のしら菊（弄○五三八）

※霰

○三九八※夜をかさねさえこそまされみしま江の玉江のあしに霰ふる比（弄○五四〇）

※行路雪

○三九九※きのふこし道にも今朝やまよはまし夜のまの雪に面かはりして

○四〇〇※やとるへき里ははるかにさえくれぬおれふす雪の竹の下道」

雪

○四〇一 夜のほと雪よりしらむねやの戸もさすかおほゆる床のさむしろ（弄○五四一）

里雪

○四〇二 ふりつみし雪におれふす呉竹のひまあらはなる里の一むら（弄○五四二）

橋上雪

○四〇三 薪こるきのふの道も跡たえて雪にあやうき木曾のかけ橋（弄○五四三）

○四〇四 名にふりて跡たに見えず津国のなからの橋につもるしら雪（弄○五四四）

○四〇五 よもすからふりつむ雪にたひ人のふむ跡おしきあさむつの橋（弄○五四五）

関路雪

○四〇六 こえわひぬもるとしもなき相坂の関の名たてにつもるしら雪（弄○五四六）

○四〇七 都出し秋の日数もふる雪に行衛やいつこしら川の関（弄○五四七）」

○四〇八 をのつからとくるをまたはふる雪にいつかはこえん下ひものせき（弄○五四八）

山家雪

○四〇九 山ひこのこたえもけさはうつもれて雪にさひしき松のした折（弄〇五四九）

古寺雪

○四一〇 今こんといひしはかりのことくさもかれて跡なき雪のふるてら（弄〇五五〇）

枯野霜

○四一一 むさしのゝ草の枯葉にをく霜や秋みし露のゆかり成らん（弄〇五五二）

※竊中雪

○四一二※中々に先立人の跡とめてまよひやせまし野への白雪（弄〇五五二）

網代雪

○四一三 山の名の朝日を待てうち河のあしろによるの雪やきゆらん（弄〇五五三）

氷

○四一四 山川の滝つ岩波をとたえてこほりにむせふ風のさむけさ（弄〇五五八）

○四一五 引すてしひたのかけ縄たえす猶氷をたゝく山川の水（弄〇五五九）

○四一六 立よりしかけのし水もさえはてぬ柳の糸をむすふ氷に（弄〇五六〇）

炭竈煙

○四一七 ふりつもる雪もうつまぬ炭かまのけふりに分る小野の古道（弄〇五六二）

冬梅

○四一八 またさかぬ梅のたち枝にふる雪は思ひのほかの花とこそみれ（弄〇五六三）

早梅

○四一九 しらきくの花より後の一花に春をもまたぬ春風そふく（弄〇五六四）

寒草纔残

○四二〇 難波江のあしのむらたち霜かれてひとよに残るとしの暮哉（弄〇五六五）

歳暮」

○四二一 四十までとまらぬとしの道にたに猶まとひてやけふはしたはん（弄○五六八）

仏名

○四二二 数々にいかゝとなへん一こゑに三世の仏のなもあみた仏（弄○五六七）

○四二三 となへてよ三世の仏のみな川渕とつもれる罪やうかふと（弄○五六六）

歳暮哥五十首別記之

○四二四 わたの原よるへさためぬあまの子も波にやとしのゆくかたをしる（弄○五一九）

（五行分空白）

（二丁分表裏空白）

恋

初恋

○四二五 行すゑにあふ人なくは恋の山いかにせんとかおもひいるらん（弄○六二二）

○四二六 しらせはやすくもの岡の初わらひけふもえそむるしたの心を（弄○六二二）

○四二七 みなと出るもろこし船のいつくともよるへなみちにこかれそむらん（弄○六二三）

○四二八 つるにさてあはんあはしもしらぬまの恋ちにけふそ身をはかへぬる（弄○六二四）

忍恋

○四二九※一ことのつねのなさけも人しれぬ心あるより忘れぬかな（弄○六二九）

○四三〇 とへかしなをのしのはら忍ふにもあまる涙の露はいかにと

○四三一 人しれすかゝるはよしや袖の波よそにひゞきのなたにたゝすは（弄○六二五）

○四三二 心にはいてやとおもへと口なしのいはてそ忍ふ山ふきの花（弄○六二六）

○四三三 思ひあまり人のうへとやかたらし袖にまきれん涙なりせは（弄○六二七）

○四三四 枕にはさよひもらしぬつゝめとも涙のしらぬおもひならぬは

○四三五 それもうししのふの浦のもしは草かくともつるに人のしらすは（弄○六二八）

※忍恋

○四三六※我涙もらしやせましなへて世の人の心を枕なりせは

寄涙忍恋

○四三七 世にもれん名をたにさらはせきとめよ涙ふりゆく袖のしからみ(弄○六三〇)

○四三八 しはしこそせくともせかめ涙川つるに袖より名をやなかさん(弄○六三一)

不言恋

○四三九 なには江のみをつくしてやしらるへきいはぬ思ひのふかきしるしは(弄○六三二)

拾遺集の一句を題にて、いはぬを人の

○四四〇 あはれともいはぬを人のとかとたにまたしらせねはえこそうらみね(弄○六三三)

不言出恋

○四四一 かくとたにいひ出ぬまのあやめ草なかきねをやは袖にかくへき(弄○六三四)

※忍久恋

○四四二※人めよくうつそつらきとしをへてあしもやすめぬ夢のかよひち(弄○六三五)

※不逢恋

○四四三※杉ふける軒の板間の草しけみあはてくちゆく袖を露けき(弄○六九〇)

欲言出恋

○四四四 いひいてんひまこそなけれわきかへる心はふかきこやのいけ水(弄○六四二)

○四四五 まてしはし磯まかくれのなのりその名のりそめても人のつらくは(弄○六四〇)

○四四六 池水のいひたに今ははなちてんこひちのそこも人にみゆやと(弄○六四一)

互忍恋

○四四七※かひなしやあふせもしらて鳩とりのしたにかよはん心はかりは(弄○六三六)

○四四八※しのふかたにいひなす人のつらさをもことに出てはえこそうらみね(弄○六三七)

※依忍増恋

○四四九※今はよいひこそいてめ池水のつゝむにいとあまる涙を(弄○六三八)

○四五〇※いかにせんいはてやつるに山ふきのやへにかさなる色のふかさを（弄〇六三九）

忍逢恋

○四五一 天地の外にはしらぬあふことを涙よ人のうき名もらすな

顕恋

○四五二 さのみやは袖のとかもかこつへき心からこそもらすなみたを（弄〇六四四）

六帖題にてよみし中、顕恋の心を

○四五三 こひそめし色やこん屋のたかもかりはせとも袖のよそにかくれぬ（弄〇六四五）

欲顕恋

○四五四※いかにせん忍ふとすれと思ふにはあはれそむかぬる袖の涙を（弄〇六四六）

○四五五 ものゝふの弓削の河原のむれ木も名にあらはれんことと思はぬ（弄〇六四七）

○四五六 忍ふとも人やかめん涙のみおさへの関のもるにつけても（弄〇六四八）

名立恋

○四五七 君かせぬ枕につもるちりよりやなき名もたかき山となりけん（弄〇六四九）

○四五八 いかにせんしほのひかたのうつせ東むなしき名のみ世にや残さん

経年恋

○四五九 あさからぬ思ひのほとはとし月のうきにたへたるころにもしれ（弄〇六五〇）

○四六〇 一かたはよはりもゆけなとしをへてわかこふらくよ人のつらさよ（弄〇六五一）

○四六一※おりおりにかはる心のなとされはおなし人には恋わたるらん

○四六二 とし月を杉の板間のあはてのみ袖にもりくる有明の月（弄〇六五二）

祈恋

○四六三 いかならん神にむかひていのらはかわか恋せしのみそきうくへき（弄〇六五三）

○四六四 うきにたへて猶たのめとやわかいのるみそきをうけぬ神の心は（弄〇六五四）

○四六五 我恋の涙の雨をやめたまへめくみひろせの神ならば神（弄〇六五五）



〇四六六 わかいのるしるしあらはせみわの山すきし神代のむかし思はゝ（弄〇六五六）

契恋

〇四六七※さらはなと一かたにしもつらからてあるにもあらぬ身の契哉

〇四六八 我思ふ心ならひにわすれし人のちきりもあはれとそきく（弄〇六五八）

〇四六九 とくましき世ゝのちきりのゆへをたにしらて心やむすほゝるらん（弄〇六五九）

〇四七〇 世ゝのむくひ思ふもかなし誰かたやつらき契のはしめなりけん（弄〇六六〇）

〇四七一 我やいひしよも偽になりはてしなをさりならずきることのは（弄〇六六一）

〇四七二 なをさりにかけし契りの一ことをたえずやなかき玉のをにせん（弄〇六六二）

〇四七三 偽りにかならずいひしちきりそとしらぬはかりを身の頼みにて（弄〇六六三）

〇四七四 いつとなく我身にしめてたのむ哉なけの情にいひし一こと（弄〇六六四）

〇四七五※つるにさてへたてやはてんいつはりの契かさなる夜はの衣手（弄〇六六五）

互祈恋 「契恋ノ前二可書」

〇四七六 人わかぬ神の心になとされはうきひとかたのみそきうくらん（弄〇六六六）

〇四七七 誰かたに心ひくらんみしめ縄おなし社に人もいのらは（弄〇六六七）

変契恋

〇四七八※世ゝかけて何ちきりけん月日たにうつれはかはる人の心を（弄〇六七〇）

〇四七九 思ふにはなをこそこゆれ波かけていひし契りのすゑの松山（弄〇六六八）

〇四八〇 いつはりと思はて契ることのはも我身の秋に色そかはれる（弄〇六六九）

※聞恋

〇四八一※萩の葉の露はこゝろの何なれやそれと聞より袖のぬるらん（弄〇六四三）

待恋

〇四八二 なをさりに人はたのむることのはをわか身にしめていく夜まつらん（弄〇六七二）

〇四八三 いひしまゝに猶そまたるゝとし月のうきいつはりにこりもはてねは（弄〇六七三）

※賀茂の祭の比かならずこんとたのめし人の、よひ過るまでとはさりけるおりしも

ほとゝきすのなきけるを

○四八四※契りをきて待夜ならずは郭公月に更ゆく一こゑの空（弄○六七四）

契待恋

○四八五※たのめすてゝこぬ夜は見すやいつはりのなき世に出る山のはの月

○四八六 いつはりの契りもよしやまたすと思ひわするゝ夜半しなれば（弄○六七五）

○四八七 一すちに猶こそたのめさゝかにの糸にかけたるちきりはかりを（弄○六七六）

忍待恋

○四八八 待ことをなみたにそへてつゝますは我名やたてん袖の月かけ（弄○六七七）

※待空恋

○四八九※今そしるまでといひしは更る夜の鳥とかねとのこゑにそ有ける（弄○六八一）

○四九〇※まつといひしわか偽に更にけり袖の涙にのこる月かけ（弄○六七八）

○四九一※更てやと待したのみもつきはてぬわかれはよその暁のかね（弄○六七九）

○四九二※さりとともまつに更行暁の涙かすそふ鳴の羽かき（弄○六八〇）

不逢恋

○四九三※今はたゝつれなき人の行すゑにむくはんことそせて悲しき（弄○六九二）

○四九四 なかゝらぬほとそしるゝさきの世の契りはたとひ末にありとも（弄○六八二）

○四九五※こひしなん身の後にこそいつはりのなき人数に人は思はめ（弄○六九二）

○四九六 袖のうらによせくる浪のうつせ貝あはてむなしき名をやとゝめん（弄○六八三）

○四九七 人に又我やかへりてつらからん心かへするならひなりとも（弄○六八四）

※寄薦恋

○四九八 夜もすからわかあらましにすかこもの七ふをわけてみふにこそぬれ

（不逢恋）

〇四九九 つれなさをくらへははてのいかならむわか玉のをと人のこゝろと（弄〇六八五）

〇五〇〇 よしさらはなをさりにたにたのめをけしちのまろねの契なりとも（弄〇六八六）

〇五〇一 おなし世にめくりあはすはさのみかくうき人ゆへの物は思はし（弄〇六八七）

〇五〇二 こひしなむなくてそ人はとはかりのあはれをせて後の契りに（弄〇六八八）

〇五〇三 恋しなむうき身はさてもむくふへき世の契りの程そ悲しき（弄〇六八九）

一句を題にて

〇五〇四 こゝろみに此世なからの夢もかなあひみて後も物やおもふと（弄〇六九三）

※偽恋

〇五〇五 ※うき身にはたのめもをかし偽のたえてよになきならひ也せは（弄〇六九四）

逢恋

〇五〇六 ※夢にのみ見し面かけのそれなからあふにかはるはうつゝ也けり（弄〇六九五）

〇五〇七 うれしさにたへすやあすはかたらまし我のみつゝむうき名なりせは（弄〇六九六）

〇五〇八 とし月のつもるうらみもわすられぬむかふあはれの心よはさに（弄〇六九七）

〇五〇九 つゝみけん袖の涙のいつしかとあふよの身にもあまりぬる哉（弄〇六九八）

稀会恋

〇五一〇 むすひけん契りはさても下ひものあふ夜はとくる心ともかな（弄〇六九九）

夢中逢恋

〇五一一 はらはしな涙の露のたまさかにあふよは人の思おもひしれとて（弄〇七〇〇）

別恋

〇五一二 うれしと思ひわたらんよなよなの人もゆるさぬ夢のうきはし（弄〇七〇一）

〇五一三 又いつとむすひたにをけ山の井のあさき契りもあかぬ別に（弄〇七〇六）

〇五二四 ありありて此わかれちの涙ゆへ日比つゝみし名をやもらさん（弄〇七〇七）

〇五二五 暁のわかれよされはいつとてもおしくやはあらぬ有明の月（弄〇七一一）

- 五二六 うきは身にかそへもしらす今はとて別にむかふ鴨のはねかき（弄〇七〇九）  
 ○五二七 昨日までよそに見てしかあかつきの空にわかるゝみねのよこ雲（弄〇七一〇）  
 ○五一八 あかつきのつれなき袖のわかれより涙にのこる有明の月（弄〇七〇八）  
 ○五一九 我のみのうきあかつきとなかむれば嶺にわかるゝよこ雲の空（弄〇七一一）

逢不会恋

- 五二〇 ※かきたえぬほとは軒はの草のはにたのみをかけしさゝかにの糸（弄〇七〇四）  
 ○五二一 ※さためなき人の心のいかなれはうき一かたにかはりはつらん（弄〇七〇五）  
 ○五二二 よりそひし慎のはしらよなとされはわれてはあはぬ契り成らん（弄〇七〇二）  
 ○五二三 身の上にきゝそまかへしかはらしといひてわかれし有明の月（弄〇七〇三）

変恋

- 五二四 かはらしとかけてちかひし月影をさすかはちてや人のみるらん（弄〇七一五）

※尋恋

- 五二五 ※契てししるしやいつらたつぬれとこたへぬ宿の杉のむら立（弄〇七一一）  
 ○五二六 ※なをさりとへとたのめし一ことをうき偽に定かねつゝ（弄〇七二六）  
 ○五二七 ※今はうきわか心をそたつぬへきありかしらせぬ人のつらさに（弄〇七二四）

西方述懷哥中におなし心を

- 五二八 かはり行人の心を見てもまつ弥陀のちかひそいとゝたうとき（弄〇七一一六）

恨恋

- 五二九 ※吹みたる風をゑにかくまくす原うらみはいつもかはらさりけり（弄〇七三一一）  
 ○五三〇 あまの住里のしるへの夕煙きえはそ人の思ひしるへき（弄〇七二七）  
 ○五三一 いかにせんうらみおは野にはなつ火のけつかたしらぬむねの煙を（弄〇七二八）  
 ○五三二 心なきいは木の涙のあまたにもうらみに袖をほしそわひぬる（弄〇七二九）  
 ○五三三 それとなくみせもきかせも我袖に露の玉まくすのうら風（弄〇七三〇）

恨身恋

○五三四 今はわか身をやうらみむ真葛原人はかれゆく庭の秋風（弄○七三二）

忍恨恋

○五三五 しのふ山かやかしたはふ葛かつらくるしや人をうらみかねつゝ（弄○七三三）

相互恨恋

○五三六 たえねたゝくる夜はなしにくすかつらうらみをかくる風のたよりは（弄○七三四）

絶恋

○五三七※みせはやな水底ふかきさゝれいしの中の思ひはたゆる物かは（弄○七四〇）

○五三八 うたかひし心のうらのすゑつるにまさ木のかつらくるよはもなし（弄○七三九）

○五三九 いかにちきりいかにねしよの身のとかを思ひうとみて絶ははつらん（弄○七三六）

○五四〇 おりおりはあさきながらに見し影のそれさへたえぬ山の井の水（弄○七三五）

○五四一 ふみ見てし道さへたえていつよりか心かよはぬ中となりけん（弄○七三七）

○五四二 我にこそたゆともたえぬ玉のをにかけし社の神の名もおし（弄○七三八）

欲絶恋

○五四三 蜘蛛のいを風にまかせてみるよりも猶我中のたえぬへきかな（弄○七四一）

○五四四 あやにくの心にやとしてしは又こゝろむるまにうとくこそなれ（弄○七四二）

※誓絶恋

○五四五※いかなれはくちしなからの橋はしらたてしちかひの跡たゆるまで（弄○七四三）

契絶恋

○五四六 たえにけりあまのたくなは末なかくかけし契りは今そくやしき（弄○七四四）

恨絶恋

○五四七 かへしてしよるの衣のうらみたに絶て跡なきゆめのかよひち（弄○七四五）

○五四八 まくす原たよりの風も吹たえてうらみしまての秋そ恋しき（弄○七四六）

○五四九 こりすまに猶やうらみむ友千鳥ふみかよひにし跡はたゆとも（弄○七四七）

○五五〇 かくさはと心にはちてうらみしをやかてかことに人やたえぬる（弄○七四八）

絶久恋

○五五一 山おろしに谷のま葛も枯はてゝ今はうらみん使たになし（弄○七四九）

被忘恋

○五五二※わすらるゝ身に猶とまる面影やつらき心のかたみ成らん（弄○七五一）

○五五三 わすれゆく人の心にしたかはてうき身のかたにとまるおもかけ（弄○七五〇）

○五五四 おもふ中をはなれんこそはかたからめ忘るゝ人をなとしたふらん（弄○七五二）

○五五五 ちかひてしわか身をさへに忘れ行人の心をいかゝうらみん（弄○七五三）

○五五六※忘らるゝ名<sup>つらさを</sup>をたにせめて忍ふにそおなし軒はの草の名もうき（弄○七五四）

昼恋

○五五七 草の葉もひるまはなとかなかるらむ風にしらぬ袖のしらつゆ（弄○七五五）

○五五八 よるのみそもゆとはきゝしみかきもり衛士のたく火も身のたくひかは（弄○七五六）

切恋

○五五九 此暮をとほすは我もかきりそと玉のをかけてまつこゝろかな（弄○七五七）

○五六〇 枕より跡より恋のせめてたゝつらさにまくるこゝろともかな（弄○七五八）

恋命

○五六一※つれなさのはてたにしらてなかくらぬいのちをかけてこひやわたらん（弄○七六〇）

○五六二 あた物と思ひもはてすうきにたへつらきを忍ふいのちなかさは（弄○七五九）

恋夢

○五六三 こひてぬるかへにおふてふ草の名のいつまで人を夢にたにみし（弄○七六一）

○五六四 あふとみる夢たになくは何をかはひとりぬる夜のなくさめにせん（弄○七六二）

恋俤

○五六五※さらは身にそはてもあれな朝夕にいはすわらはぬ人の面かけ（弄○七六四）

○五六六 うぐつらまき心にも似ぬおもかけのなとわか床にたちはそふらん（弄○七六三）  
旅泊恋

○五六七 契りけん跡たに波のうきねには夢のうちにもうらみやはせぬ（弄○七六五）

※冬恋

○五六八※我宿の霜のした草秋はてゝかるゝは君にかきらさりけり（弄○七六六）

入冬増恋

○五六九 みせはやな心の秋は過ぬとも時雨の色を袖にうつして（弄○八〇五）

寄山恋

○五七〇 分まよふ恋の山路のつゆふかみおもひかへらん道たにもなし（弄○七六九）

寄川恋

○五七一 そこひなき洌となりても涙河袖にうき名のなとさはくらん（弄○七七〇）

○五七二 わかためはふちせもいさやあすか川かはらてふかき思ひなるらむ（弄○七七二）

寄野恋

○五七三 つれなさのはてたにあらはむさしのゝ草葉の露は身にあまるとも（弄○七七二）

寄雲恋

○五七四 心のみ空になり行あま雲のかゝるおもひはよそにたにしれ（弄○七七三）

○五七五 しのゝめにわかれし空のかねことよきえて跡なき嶺のしら雲（弄○七七四）

寄煙恋

○五七六 くゆりわひ思ひきえなん空にたに誰ゆへならぬけふりとはみよ（弄○七七五）

寄海恋

○五七七 あふことをいつとはなしになき名のみおふの浦なみたちさはくらん（弄○七七六）

○五七八 いせの海もちいろときけはたとへても心のそこをなにゝしらせん（弄○七七七）

寄夢恋

○五七九 身のとかに思ひかへせとさよ衣夢には人をうらみつるかな（弄○七七八）

○五八〇 うつゝには思ひたえにき今はたゝ夢のあふせに身をやかへまし（弄○七七九）

○五八一 人のみする夢ならなくにいかてかくさめての後もうれしかるらむ（弄○七八〇）

寄涙恋

○五八二 あはつかに何事にかはとはかりも袖のなみたを人のとへかし

○五八三 わか袖の涙を人の川とみてわたらぬ中とたえやはつらん（弄○七八二）

○五八四 物思ふ袖の時雨やうき人の心の秋のなこりなるらん（弄○七八二）

寄木恋

○五八五 あふことによしやかへてん名取河身はうもれ木のしつみはつとも（弄○七八三）

寄鏡恋

○五八六※見しまゝに残るもつらしますかゝみうつりはてにし人の面かけ（弄○七八五）

○五八七 神かけてちかひやせまします鏡みするはかりの思ひならねは（弄○七八四）

寄花恋

○五八八 さらにぬたにうつろひやすきうき人の心の花に春風そふく（弄○七八六）

寄絵恋

○五八九 いとゝ猶思ひやそへんこひしともいへはゑにかく人のおもかけ（弄○七八七）

○五九〇 夢にみしあしたの雲のうつしゑもそれとは残る水くきの跡（弄○七八八）

寄虫恋

○五九一 おちぬへき小萩かつゆに鳴むしの色音あやうきわかたもとな（弄○七八九）

○五九二 鳴あかすまかきのむしもよますから露にぬれつゝねにたつるまで（弄○七九〇）

※寄船恋



○五九三※涙のみもろこし船のよるとなくひるとも波にぬるゝ袖かな（弄○七九一）

寄棹恋」

○五九四 みなと江や波のたかせにさす棹のひとよのふしに袖ぬらせとや（弄○七九二）

※寄橋恋

○五九五※ふみかよふ道さへたえぬ末かけてちきりわたりしまゝの継橋（弄○七九三）

春恋

○五九六 風ふけはいづれをそれとわきもこかあかものすそに花のちるらん（弄○七六七）

暮春恋

○五九七 くれて行春のなこりもよしやたゝ人のこゝろの花しちらすは（弄○七六八）

※秋恋

○五九八※君か手にならずあふきの風よりや身にしむつまと秋はたつらん（弄○七九四）

月前恋

○五九九 物思ふ我たもとにやうつらんお花か露にあまる月影（弄○七九五）

思来世恋

○六〇〇 今までの契りはさてもこん世には人にうき身とむまれすもかな（弄○八〇三）

等思兩人

○六〇一 こひしさもつらさもおなし涙にてひたりみきりにぬるゝ袖かな（弄○八〇四）

恨

○六〇二 はまゆふのへたてそめてし心よりうらみや人のもゝへなるらむ（弄○八一二）

思

○六〇三 おきもせすねもせて物を思へとやあひみる夢もさむるつらさも（弄○八一三）

片思

○六〇四※残なく人のつらさは見はてにきさてもわすれぬ我そつれなき（弄○八一七）

○六〇五 かりにたにしらぬそつらきみよしのや我かたにのみよるの思ひを（弄〇八一四）

○六〇六 よゝかけてむすひもをかね契ゆへわかた糸の何みたるらん（弄〇八一五）

○六〇七 木の間もる影もあやなし三か月の我のみおもふ心つくしは（弄〇八一六）

王昭君 「可入雑」

○六〇八 つねにみしかゝみのかけて思ひきや身をこの国にうつすへしとは（弄〇九三〇）

○六〇九 くやしきの朝な朝なにますかゝみなとこのまゝにうつさゝりけん（弄〇九三一）

※寄水窓

○六一〇※むすひけん世ゝの契りはあさくとも影たにみえよ山の井の水（弄〇七九六）

※寄獣窓

○六一一※ひとりのみふするのかるもいつよりかかきもはらはぬ床のさむしろ（弄〇七九七）

○六一二※あこかるゝ心の駒にまかせても忍ぶのおくの道やまとはん（弄〇七九八）

○六一三※あこかるゝ心の駒よせめてさはまよふ恋路のしるへとをなれ（弄〇七九九）

○六一四※つれなさにまけぬ心の駒くらへたつなをさらは引もとめはや（弄〇八〇〇）

○六一五※あまならてふするのかるも我からそかくやすからぬ床のさむしろ（弄〇八〇一）

※馴恋

○六一六※いつまでのうらみそされは里のあまの塩なれ衣なるとはかりに（弄〇七一七）

○六一七※淀川をのほる高瀬のみなれ棹みなれてのみやこひわたるへき（弄〇七一八）

○六一八※せめて又なるゝをいとふ心かとつらきかたにもえこそうらみね（弄〇七一九）

○六一九※ことはらぬ人つてにたにかこたましなれぬる中のつらさならすは（弄〇七二〇）

※晚風催恋

○六二〇※こと浦になひくもしほの夕煙つらきしるへの風もうらめし（弄〇八〇二）

※厭恋

○六二一※いとほるゝ身はことほりとしりなから人やはつらき我そつれなき（弄〇七二二）

※恋奴

○六二二※あすしらぬ世をはなけていたつらにこひのやつこと身をやなすへき（弄〇八一二）

※知身恋

○六二三※数々にうき身のとかを思ひいてゝ人のつらさはうらみしもせし（弄〇七二三）

○六二四※身をしれとおやのいさめしふること人のつらさに思ひ出ぬる（弄〇七二二）

※通書恋

○六二五※はかなしや空ゆく鳥の跡とめてしたに心のかよふはかりは（弄〇七二五）

※披書恨恋

○六二六※あまのすむ里のしるへのもしは草かくてやたえん水茎の跡（弄〇八〇八）

○六二七※ことのはのうき跡つくる浜千鳥ふみ見ていとゝそふ恨かな（弄〇八〇九）

※隔恋

○六二八※ねられねはかへす衣をへたてにて夢さへいとゝうとくなりゆく（弄〇七二四）

（半葉分空白）

※述懐

○六二九※むかし我たのみし末のたかふをも六十にあまる今そしらるゝ（弄〇九七一）

○六三〇※誰ありてなからん跡にいつまでかむかしはとてもあはれかくへき（弄〇九七二）

※賀茂川原の古塚のまへを過るとて

○六三一※ありありていつのゆふへか此野への草葉の露にやとりさためん（弄〇八四八）

※暁

○六三二※せめてたゝねさめさりせは老らくのあかつきはかり物はおもはし（弄〇八一九）

○六三三※今は又世にわかるへきあかつきをねさめにつけて鳥やなくらん（弄〇八二〇）

※寄河述懐

○六三四※六十まで契りあればそすみ染の袖にかけこしかもの河なみ（弄〇八三五）

(二行分空白)

雑

関

○六三五 鳥のねもまたて行かふ逢坂のせきやむかしの名をとゝむらん (弄○八四九)

関鶏

○六三六 もる人も今はなき世にせきの戸のさすかあけぬと鳥やつくらん (弄○九二九)

富士 「繪賛」

○六三七 久堅の雲よりたかく出てみよふしはこゝろのふもとなりけり (弄○九三二)

濂溪先生愛蓮図 「同」

○六三八 今もなを池のはちすの香をとをみ清き心のはとそしらるゝ (弄○九三三)

水月図賛

○六三九 いつとなく心の水にうつし見よ空にくもらぬ月のひかりを (弄○九三四)

海上有舟 「繪賛」

○六四〇 わたつうみの波の心にまかせてよつなかなぬ舟のよるへなき身を (弄○九三五)

渡唐天神 「同」

○六四一 夢なれや春の一夜の松風にもろこしまてもにはふ梅か香 (弄○九三六)

紫式部石山寺に湖上の月を見て物かくかたかきたる絵

○六四二 すまの浦の秋も空にやうかふらんみるめなきさに月をうつして (弄○九三九)

湖上眺望

○六四三 やまとはたくひもあらぬから崎の松のうれこすしかのうら波 (弄○九四〇)

※冬旅

○六四四※枯はてし冬野の草の枕より跡よりつもる夜半の白雪 (弄○九一五)

旅宿

○六四五 草枕夜半のあらしのさむしろに衣かたしく野辺のかり庵（弄○九一四）

○六四六 もろともに草葉にやとる月影を露に残して出る旅人（弄○九一六）

○六四七 ふる郷にいかゝみるらむ有明よもすみの月をかたしく野へのかりいは（弄○九一七）

山路旅

○六四八 古郷の夢さへうとしいはかねの苔の衣に夜をかさねつゝ（弄○九一八）

○六四九 行さきの里ちかゝらし嶺こえてかつみつめる岩のはさま田（弄○九一九）

羈旅

○六五〇 けふいくか谷峯こえて雲水の行衛もしらぬわかこゝろ哉（弄○九二〇）

○六五一 をのつから思ひいつともしら雲のかゝる山路を今こゆるとは（弄○九二一）

羈中暮

○六五二※旅人のゆきゝの岡に日はくれぬあすかの里をあけてこそみめ（弄○九二四）

○六五三 とまるへき里はととへは夕すゝめぬくらさたむる竹の一むら（弄○九二二）

○六五四 夕つくひさすや岡への道とをみわか影ならてあふ人もなし（弄○九二三）

○六五五 里とをみしらぬ野原にかふうしの声物すこき旅の夕暮（弄○九二五）

海路日暮

○六五六 くれぬとて苦引おほふこゑすなりそこともしらぬ浪の枕に（弄○九二六）

羈中浦

○六五七 筆にたにおよはぬ物をはるはると思ひかけこしわかうら波（弄○九二七）

遊女

○六五八 さためなき一夜の袖のうつりかをいく度したふ名残なるらん（弄○八一八）

後鳥羽法皇御身つから御影をあそはされて、隠岐島より賀茂氏久もとに給はらせ給

たるをおかみ奉りて

○六五九 おきの海やかへらぬ波にこきかへる月のみふねの影そさやけき（弄一〇〇二）

惜別

○六六〇 わかれちをしめておしめは面影を我身にとめて人のゆくらん（弄〇九一二）

むさしにまかりくたりける時

○六六一 そひてこし都の人のおもかけをとめてやこえん相坂のせき（弄〇九一二）

祝

○六六二 ※君か代のたくひなりけりかそふれとかそへもしらぬいよのゆけたは（弄一〇〇四）

○六六三 をのゝえの朽し山路をいく度か君か御代にはゆきかへるらむ（弄一〇〇二）

○六六四 草も木も今そなひかん君か代の日数ほとよき風のまにまに（弄一〇〇三）

寄松祝

○六六五 君をこそ千とせのかけも高砂の松はむかしの友とみるらめ（弄一〇〇五）

寄木祝

○六六六 君のみや千世の後せのやます猶葉かへぬ色をみねの椎柴（弄一〇〇六）

寄道祝

○六六七 神もさそうれしとはみんなとこ山さかゆく道を君にまかせて（弄一〇〇八）

○六六八 君か代は七の道のみつき物はこふにあかぬ九重のそら（弄一〇〇九）

寄弓祝

○六六九 あつさ弓八隅おさまる君か代をためしにひかむ末そはるけき（弄一〇〇七）

（一行分空白）

熊野巡礼し侍し時、下向道に大和の天香久山のふもと法然寺の長老しれる人にて、

立よりて一宿して此比の旅途のつかれもいさゝかやむ心ちしければ

○六七〇 ふみわけし苔の衣の露をしもけふやほさまし天のかく山（弄〇九二八）

（一行分空白）

苔

○六七一 かく山のむ杉かもとにむす苔のかれても色やときは成らん（弄○八七二）

杏

○六七二 うつしうへし比もへなくにしき島のやまとにはあらぬから桃の花（弄○八七三）

櫛

○六七三 朝ことのつみうかへたるあか水にしきみの花のかけそうつれる（弄○八七四）

櫛

○六七四 宿ことの千とせをかけてゆつるはに春の小松を引やそへまし（弄○八七五）

令法

○六七五 とし月のはたつもり行老らくの身をわすれつゝあそふ春山（弄○八七七）

湊

○六七六 まちこふる人もなき身は大とものみつの湊にとまりはつとも（弄○八三九）

崎

○六七七※辛崎の波にあらしやうつるらん一木の松に声を残して（弄○八四一）

○六七八 さ夜ふくるをもさやけししら波のよする玉ものゆらのみ崎に（弄○八四〇）

田家

○六七九 ひたなるこ引しめ縄のなき夜もいねすやしつか山田もるらん（弄○八六六）

田家風

○六八〇 みとりなるおなしほなみ色かへて吹かたみする小田の秋風（弄○八六七）

鷗

○六八一 とにかくに波にむかひてゐるかもめふくかたしるき沖つ塩風（弄○八六五）

（二行分空白）

※おなし文字なき哥 冬山里

○六八二※ふゆくればひとめもつねになをこえてみ山おろしの風そさむけき（弄○九五九）

※回文哥 閑居

○六八三※わかすまる人くをとすらなかりけりかならずとをくとひるますかわ（弄○九六〇）

※人の庭に大<sup>オホ</sup>黄<sup>ワウ</sup>といふ草花さけるを

○六八四※なかなかにはなのさくちるこのにはにのこるちくさのなはにかなかな（弄○九六一）

※折句 なむあみたを句の上にて

○六八五※なかき世のむくひもしらてあすまてと身をいたつらにたのみける哉（弄○九四九）

○六八六※何と又むすひそめけん秋の露身にしむ色の玉とみるまで（弄○九五五）

○六八七※何そこの六のちまたもあきらけき道のひかりにたれこえさらん（弄○九五〇）

○六八八※中々にむなしき法の跡とめて道なき道に誰まよふへき（弄○九五二）

○六八九※なけきつるむかしの人もあきらけき三代を待てそ玉はみかきし（弄○九五三）

○六九〇※難波かたむれるたつもあしへよりみつの塩路にたちそわつらふ（弄○九五四）

○六九一※涙川むすふみなはのあすまでも身のきえさらんたのみやはある（弄○九五五）

○六九二※波たかきむこのうらはのあまを舟身をうき波<sup>ナミ</sup>にたとるはかなさ（弄○九五六）

※あみたふつ

○六九三※あかしかた身をつくしてそたのむへきふかきにしつむつみやうかふと（弄○九五七）

○六九四※あらしふくみわのひはらにたつ杉のふかき木すゑの月のさむけさ（弄○九五八）

（七行分空白）

哀傷

賀茂保最亡父の形見とて、屏風に源氏物語の哥かきたるを見せければ

○六九五 あらき風ふせきし袖のかたみそと思はゝ今もあたにやはみん（弄○九四六）

おなし人こもり居たるを祭の日とふらふとて

○六九六 あふひとか卯月きぬれと藤衣涙をのみや袖にかくへき（弄○九四五）

なき人の記念を人のつたへければ



○六九七 我身をもつるには野への草とみて露のかたみを人やをきけん（弄○九四一）

同行の僧さきたちたるを思ひ出て

○六九八 朝夕にたつ面かけは雲となりなみたは袖の雨とこそふれ（弄○九四二）

ふひんにしけるわらは身まかりて七日にあたる日」

○六九九 おもひきや夜をしへたてぬから衣はさて七日になりぬへしとは（弄○九四三）

十一月廿日祖母の廟前にて

○七〇〇 たらちねのおやのおやとふ古つかの雪に跡なき跡そかなしき（弄○九四四）

※無常

○七〇一※此比はをくれさきたつはかなさをきかぬたえまそおとろかれぬる（弄○九四七）

（七行分空白）

神祇

○七〇二 つたへこし<sup>まもれな</sup>みつのをしへの外に又神の道ある国そわか国（弄一〇一〇）

○七〇三 世をてらすひかりはさそな神ち山今もむかしの秋のよの月（弄一〇一一）

新勅撰にや土御門内大臣、八百万神のちかひもまことには三世の仏のめくみ也けり、とあるふることを見奉りて、心にそみてありかたくそ覚え侍る。まことに今の世神道者として往々にさたすめるをきけは、仏法、神道、各別の説をたてゝ衆合を破せんとするは、みなむかしの人の心をもしらす、書をけることをも見ざるなるへし。

此哥のみにかきらす、神祇釈教によみをける先賢の哥、あけて「数ふへからす。天竺・もろこし・吾朝、大道実<sup>まこと</sup>に二つみつにはあるへからす。末世になりて人我いよいよさかりになりて、魔外のたくひおほく、獅子身中の虫となる事をしらす。ましてちかき比は公武にひろこりて、やうやうかみつかたの人たにも仏神水火の思ひをなせり。これしかしながら、やまともろこしのふることを平心にして見ざるかいたすところなり。あはれ高きもいやしきも、むかしも今も其けちめなきはたゝ此大道

の心ひとつなり。されは此かきあつめたる哥とも、いにしへの人の家集などのやうになましひに部立をならへてしるしぬること、心ある人の」見てあさけり思はむをかへり見ざるにしもあらねと、またく我と哥といふへき物ならんとも思ひたらず。もとより数ならぬ身にて数ならぬ身なとよめるも聞けるやうにはおほえたれと、をのかしゝ心のすちをいひて心のまことをあらはさんは、さのみふかき罪にもあらしとおもふはかりなり。

右の哥を思ひて賀茂祭の日

○七〇四 鷲の山いつる日影にかけまくもかしこき神のもろかつら哉（弄一〇一二）

寛文のはしめ正月十五日、賀茂軌久精進頭つとめをはりて、貴布祢にかへりまうしてかへりけるに、いひつかはしける」

○七〇五 今日をなを君か千とせや祈るらん思ふことなる河上の神（弄一〇一六）

白鬢の社頭にとまりて

○七〇六 跡たれしむかしをとへは神かきによせてはかへるしかのうら浪（弄一〇一五）

神祇

○七〇七 世間のちりにも神やますかゝみくもる心に影は見えねと（弄一〇一三）

社頭杉

○七〇八 跡たれしあとなきにしも神垣のしるしことなる三輪の杉村（弄一〇一四）

（四行分空白）

○七〇九※家をいて山に入ても捨はてぬ身は何ゆへそたゝこゝろのみ（弄一〇二六）

○七一〇※さとりえぬ契りもつらしなとされは我身ひとつのものとこゝろを（弄一〇二五）

釈教

○七一一 心よりわかこゝろにやつたへましをしへの外の法のをしへは（弄一〇二七）

○七一二 をしなへてむなしとゞけることはりを心のとはゝありとこたへん（弄一〇一八）

〇七二三 うらやましやすむ雲ゐのさはりなくまよひこしちにかへる鴈かね（弄一〇二一八）

〇七二四 空の海に月の御舟はさしなから心にのりのなきそかなしき（弄一〇九八六）

〇七二五 そらたかく雲よりうへをなかわれは月にをとなき秋風そふく（弄一〇一九）

〇七二六 たえず我三世の仏のためなれはおらて心の花やたむけん（弄一〇二〇）

〇七二七 いつよりか野中の清水にこりきてもとの心にかへらさるらむ（弄一〇二二）

〇七二八 けふの世を思ふ心はありなからあすの身をしる人そまれなる（弄一〇二二）

〇七二九 とはゝやな真如法性の都鳥わかおもふことはありやなしやと（弄一〇二三）

〇七二〇 あひかたき法にあはすは何をわかぬかふ思ひの玉のをにせん（弄一〇二四）

若有聞法者無一不成仏の心を

〇七二一 たえずきく御法の庭にちる花ややかて心の根にかへるらむ（弄一〇二八）

念々不捨者

〇七二二 あみたふとなふる声のひまをあらみ山風さむし賤か袖かき（弄一〇三一）

願生西方

〇七二三※もらさしのちかひしあれはとはかりに西にこゝろをかけぬ日はなし（弄一〇三〇）

〇七二四 そなたにと思ひそめつるにしき木のたてしちかひはよにくちめやも（弄一〇二九）

欲知仏性義可觀時節因縁

〇七二五 おりふしをみるより外の神無月まことある世にふる時雨哉（弄一〇三二）

※一失人身万劫不復今生若不修何生渡此身といふ心を

〇七二六 後の世をたえず思ひの玉くしけふたゝひあはん此身ならねは（弄一〇三三）

※直心是仏

〇七二七※なをからむ心の末そこえて行しての山ちのしほりなるへき（弄一〇三七）

金剛經 法尚応捨何況非法

〇七二八 ちりはてし花さへあるを春風のさそふもよしやみねのしら雲（弄一〇三四）

同 応無所住而生其心

○七二九 とゝめえぬ梢の花のいかなれはたえすも春の色にさくらん（弄一〇三五）

此身即心怨也といふ心を

○七三〇 身を思ふ心はあるをいかてかは心をおもふ身のなかるらん（弄一〇三六）

順<sup>じ</sup>堺<sup>ま</sup>界難打、逆境界易打

○七三一 はしめより人の心のつれなくはわかれてななき物はおもはし（弄一〇三八）

弥勒

○七三二 みるやいかにあふけは空に高野山そのあかつきの月そさやけき（弄一〇三九）

○七三三 思ひやるそのあかつきの月影も心の水にすむとこそきけ（弄一〇四〇）

華嚴經

○七三四 鷲の山高ねの花を雲とたに思はてかへる春のかりかね（弄一〇二七）

如来一首演說法、衆生随類各得解

○七三五 春雨は梢をわきてそめねともなめことなる花のいろいろ（弄一〇四一）

末後一句破牢関

○七三六 世をはかるゆふつけ鳥の一声にやすくもこゆるあふ坂の関（弄一〇四二）

父母所生身即証大覚位

○七三七 たらちねのたねまきをきしこの身ゆへ今そみのりの花はひらくる（弄一〇四三）

從冥入於冥

○七三八 くらきよりくらき山ちをふみ見ても大かたにのみ月やめつらん（弄一〇四四）

善惡不二

○七三九 難波かたみたるゝあしもよしやたゝ思へはおなしかりの此世を（弄一〇四五）

世尊拈花

○七四〇 わしの山みねに木高き一花の匂ひは代々にたえしと思（弄一〇四六）

光明遍照十方世界、念仏衆生攝取不捨

○七四一 月影はそこわかねと宮城野の木のした露そ光すくなき（弄一〇四七）

三輩一向専念無量寿仏

○七四二 難波かたみつのとまりの波まくらうき身ひとつの秋の月影（弄一〇四八）

一心不乱

○七四三 春風はたえすふくとも色見えぬ心の花しよそにちらすは（弄一〇四九）

願弟子等臨命終時心不顛倒

○七四四 なかき世をかけて思へはくり返す玉のをはりのみたれすもかな（弄一〇五〇）

心不錯乱

○七四五 露むすふはちすの糸の一すちにかくる心はみたれすもかな（弄一〇五一）

我建超世願

○七四六※よにこゆるちかひの海の波たかくたのむわか身の末の松山（弄一〇五三）

○七四七 残りなきよはひよされは世にこゆるものとちかひに身をまかせてん（弄一〇五二）

西方去此不遠の心を

○七四八 みやこより西とはかりにきてみれはこゝもうき世のさかにそ有ける（弄一〇五四）

○七四九 よもすから空ゆく月も露結ふ草の庵のうちにこそすめ（弄一〇五五）

畢命為期

○七五〇 出るより入まで月をなかわれは空にひかりのきゆるまもなし（弄一〇五六）

厭離穢土、欣求淨土

○七五一 わひつゝはむくらの宿としもへき玉のうてなに思ひあらずな（弄一〇五七）

○七五二 世のうきを思ひ出れば山さとなかめもあかぬ秋の月かけ（弄一〇五八）

必有事碍不及向西方、但作向西想亦得

○七五三 山のは出る木かけはくもるともはるゝたのみは有明の月（弄一〇五九）

水想觀の心を

○七五四 いつとなく心の水のそこすまはねやのうちに月そやとらん（弄一〇六〇）

悟了同未悟

○七五五※嶺たかくのほりはてゝは中々にふもとの小田の数もみえけり（弄一〇六二）

○七五六 さとりけんしるしやいつら月影のひかりをかくすみわの杉むら（弄一〇六一）

涅槃会上広額堵尼成仏の心を

○七五七 心あれはあまも仏になりやせん岩にもおふる松かうらしま（弄一〇六三）

壁上蟋蟀を聞て、少林面壁思ひ出られて

○七五八 きりきりすなかきねふりをさませとてなれもやかへにねをは鳴らん（弄一〇六四）

念珠を

○七五九※をのつからむかしを今になす物はわかくりかへす玉のをそこれ（弄一〇八二）

○七六〇 のちの世を思ひの玉のをゝよはみ身のとかならてとる数もなし（弄一〇八〇）

○七六一 くり返す思ひの玉の数やそへんむかしを今の心なりせは（弄一〇八一）

仙洞に諸宗師をめされて、たひたひ説法きこしめさるゝよしうけたまはりて

○七六二 子を思ふ鶴の林の法の声今も雲るに聞えけるかな（弄一〇七二）

醍醐報恩院前大僧正の室にて

○七六三 むすふ手も祈る心も清滝のたえぬなかれや法のみななみ（弄一〇七三）

戒師のかたみとて衣を残しをかれけるを

○七六四 かたみとてをきけん露の衣てに涙の玉をかけやそへまし（弄一〇七五）

同行の僧、修行に閑東に出たつはなむけに

○七六五 閑こえてなを行すゑはとをくとも西に入日の影な忘れそ（弄〇九一三）

夕つかた鴉のなくこゑを聞て、水鳥樹林妙法の音思ひやられて

○七六六 ゆふへゆふへ西に鳴ゆくむらからすなれたに人のしるへかほなる（弄一〇七四）

雪の朝、二祖伝法の事思ひ出て

〇七六七 夜もすからふりつむ雪に心さしふかきさとの跡を残れる（弄一〇七〇）

霊雲桃花悟道

〇七六八 みちとせになるてふもゝの花よりもさとひらくる身こそまれなれ（弄一〇六九）

二月八日はしめて桜の花の咲けるを

〇七六九 驚の山ひもときそめし法の花匂ひはたえぬ代々の春風（弄一〇七二）

入涅槃の心を

〇七七〇 二月の空のけふりも立そひて霞にきえし春のよの月（弄一〇六八）

庭雪

〇七七一 かの国にちりてしくてふ花なれやまた跡つけぬ庭のしら雪（弄一〇七六）

夕雲

〇七七二 夕附日名残とゝめてくれはとり西にあやしき雲の一むら（弄一〇七七）

暮鐘

〇七七三 みるにつけきくにつけてやおとろかぬ日影も西に入あひの鐘（弄一〇七八）

数珠のふくろに哥かきてと人のいふに

〇七七四 百八の珠のかすをはわするとも心ひとつのみたれすもかな（弄一〇八三）

〇七七五 くりかへし心にかげよなもあみたこの玉のをのたえんかきりは（弄一〇八四）

※天王寺にまうてゝ西門の鳥ゐの額を見奉りて

〇七七六※あまを舟西を思はゝ難波かたみつのさかひはこきそはなれん（弄一〇七九）

※繫念無量劫の心を

〇七七七※かりの世の夢のあふせに身をかへてつらきうつゝのはてやなからん（弄一〇六七）

※理一時可消事不可頓証の心を

〇七七八※をのつから心の馬にのりえても手にとるむちはうちな忘れそ（弄一〇六六）

※一大事因縁故出現於世

〇七七九※たかための何ゆへにかは世に出ておほくの法をとき始けん（弄一〇六五）

※しぬへくおほえける比、同行の法師に念珠をかたみにとらすとて、つゝみかみに

〇七八〇※しのふへきふしはなくとも玉のをのたえぬかきりはくりかへしみよ（弄〇九四八）

（五行分空白）

右之外述懷百余首、秋夕百首、歲暮五十首并伊勢参宮記等別記之

〇七八一 はかなしななかれての世にたれみよとおもふかく水くきの跡（弄一〇八五）

（三行分空白）

寛文壬子極月廿八日 良玄

（裏見返し、裏表紙の落書き省略）

（翻刻了）

【追記】

『弄瑛集』の閲覧・撮影についてお世話になった、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校の方々に厚くお礼申し上げます。

\* 中西健治（本学人文学部教授）

日下幸男（龍谷大学短期大学部講師）